その音は月夜と共に

神光の宣告者

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

尸魂界の歴史の中で意図的にその存在を消された者は何人もいる。

後世に生まれた者はその存在を消された者のことなど知る由もなかった。

しかしその者と同じ時を生きた者の記憶の中には深くその存在は残っている。

１０００年以上一番隊三席を務めたとある死神と同じ時を過ごした死神は皆口を揃えて言った

「彼は自由な死神だった」

と。

目次

プロローグ 1
1話 1
2話 5
3話 12
4話 17
過去編
5話 25
6話 29
7話 35
8話 41
9話 47
10話 52
11話 57
12話 64
戸魂界動乱編
13話 72
14話 79
15話 85
16話 91
17話 97
18話 102
19話 108
20話 115
21話 121

プロローグ
1話

ーーー二番隊　隊舎ーーー

「夜一サン、今日はさすがに勘弁して下さいよ。」
「何を言うとる、お主の隊長就任祝いに今日は儂が奢ってやろうと言っておるのにお主はそれを無下にするのか？お？」
「夜一サン、それはもうお祝いというより立派なパワハラっス。」
　隊首室で偉そうに踏ん反り返っている褐色の麗人、四楓院夜一は面白くなさそうに顔をしかめながら目の前の男、浦原喜助に話しかけていた。
「まだ荷物の整理が済んでないんスよ。だから今日だけは勘弁してくれないスカね？」
「ダメじゃ。儂は今日お主を祝いたのじゃ、他の日は気が乗らん。」
「それって単純に夜一さんが今日呑みたいってだけなんじゃ……イタタタ!?」
　夜一は浦原に強烈な踵落としを食らわせ、そのまま足で押さえつける。
　浦原は地面とキスをした状態で身動きが取れずもそもそともがいている。
　隊首室の前を通った二番隊隊員たちは浦原の悲鳴をみんな聞いているのだがまたいつもの痴話喧嘩が始まったと思い皆誰も浦原を助けようとはしない。
「わ、わかりました。お付き合いしますから取り敢えずその足をどけてくれませんか？」
　生命の危機を感じた浦原は部屋の整理を諦める選択をした。
　浦原の言葉を聞き、ようやく足を離した夜一は機嫌が良さそうにニヤリと笑顔になる。
「全く、お主がゴネておるせいで遅くなってしまった。今から貴族街

に行くのは遠いの。仕方がない、いつもの場所でやるぞ。」
夜一は理不尽な言いがかりを浦原につけて隊長室から姿を消した。
浦原はゲホゲホと咳をしながら不足していた酸素を補給する。
平静を取り戻すと、ここのまま自室戻ろうかという考えが頭をよぎったが後が怖いのでその案を却下し、仕方なく双極の丘へと向かった。

ーーー双極の丘ーーー

双極の丘は尸魂界の外れにある。そこには大罪人を処刑するために使われる双極というものが存在している。
その地下深くには浦原喜助と四楓院夜一が秘密裏に作った、隠し部屋のような空間がある。
浦原と夜一はその空間を『修行部屋』と呼び、二人だけの秘密の場所として使用していた。
なぜそんなに広大な空間が誰にもバレていないのかというと、双極の丘には普段はほとんど人が寄り付かないからである。
それもそのはず、双極を使用するほどの大罪人は滅多に現れるものではない。双極以外何もないこの丘に頻繁に来る者は浦原と夜一だけなのである。
夜一は瞬神と言われている当代随一の瞬歩を駆使して、二番隊隊舎からものの１０秒で双極の丘へと辿り着いた。
夜一は地下へ向かおうと前に出した右足を突如止めた。
自分以外には誰もいないと思っていた丘の中心に一つの人影があったのだ。
顔が暗闇に隠れていてその男が何者なのかは夜一には分からなかった。
しかしその服装は黒い死覇装であるため、隊長格ではないことだけが分かった。
下手に動いて修行部屋がバレるとやっかいだと考えた夜一は男がいなくなるまで待つことにした。

物陰に隠れて様子を見ているとその男は空を見上げて月を見ていた。
その男は月を暫く見つめているとおもむろに懐から青色の棒状のものを取り出し、そしてそれを口元へと持って行くと、その口元から音が生み出される。
その音は徐々に繋がっていきやがて一つの曲へと姿を変えた。

その曲はなんの抵抗もなく夜一の心の中へ入って行った。
神秘的なようで儚いそんなどこか物悲しさを感じさせるような曲だった。

夜一は感嘆の声を上げる。
夜一は尸魂界の五大貴族の一つ、四楓院家の当主であるため、子供の頃から演奏会や演劇などありとあらゆる芸術を見てきた。しかし夜一にはそれらはただただつまらないものでしかなく、その良さは一切分からなかった。そんな夜一でさえもこの曲に魅了されてしまっていた。
その男の演奏は見事な余韻を残して終了した。
その男は笛のような物を懐にしまうとおもむろに夜一のいる方向に顔を向けた。
夜一はようやく我に帰り慌ててその場を離れようとする。
しかしその男は夜一に向かってニコリと微笑むとその場から姿を消した。
「どうしたんスカ、そんなところで突っ立って……ツイタ!?」
今の出来事はほんの数秒の事だったのかそれともとても長い時間が経過しているのか、時間感覚さえ狂わされるほどその曲に魅了されていた夜一はいつの間にか背後にいた浦原の存在に気付かず、長年の戦闘で培われてきた戦士の直感で浦原を殴ってしまった。
「お、す、すまん。少しボーッとしておったのじゃ。」
「どうしたんスカ、いきなり……」
「気にするな!さっ、早く呑みに行くぞ!」

夜一はそう言うと浦原の胸ぐらを掴んで強引に引きずっていく。
浦原はその夜一の顔が赤く染まっていることを見逃さなかった。

男は月が綺麗な夜に静かな場所で演奏がしたかった。
女は誰もいない秘密の場所では酒が飲みたかった。
その両者は偶然出会ったに過ぎない。
今はまだ……

2話

ーーー　一番隊隊舎前　ーーー

一番隊隊舎に入るものを威圧するかの如く高くそびえ立つ門の前で浦原は頭をかいて立ちすくんでいた。

「本当に入っていいんスよね？」

「ああ、いいぞ。お前はもう隊長なんだ、何の問題もない。」

「そうは言っても……アハハハ。」

情けなく笑う浦原を見て隣にいる男は面倒臭そうにため息をつく。

その男はつい先日まで浦原の着ている白羽織を着ていた女性を思い出して恨めしそうに浦原をにらんだ。

「なんで曳舟ちゃんの次の隊長が女じゃなくて男なんだ。」

「そんなことボクに言われても仕方ないっスよ。文句言うなら総隊長サンに言ったらいいじゃないスカ、玄太郎サンならいつでも会えるでしょ？」

頭をかいてヘラヘラと笑う浦原の姿を見て玄太郎と呼ばれた男はこいつが隊長で本当に大丈夫かと心配になる。

今まで仕事上、全ての隊長を新任の儀の部屋へ連れてきた玄太郎だがここまで緊張感のない奴は始めてであった。

「ほらとっとと入った。もう他の隊長は夜一ちゃん以外みんな来てるんだ。急いだ急いだ。」

浦原の背中を押して無理矢理隊舎の中へと入らせる。

隊長羽織を着た男が、死覇装を着た男に怒られている。

明らかに立場が逆転しているのだが、これを無礼だと諌める人は一番隊にはいない。

浦原自身も立場など大して気にしない性格であるため特に怒ることもなく会話を続けていた。

「夜一ちゃんって……。あの人にそんな呼び方できるの玄太郎サンくらいっスよ。」

「そうだろうな。あいつと俺は運命で結ばれた仲だからな。」

そう言って自信満々に笑う玄太郎を見て、浦原はやはりこの人は只者ではないと心の中で思った。

永遠に続いているのではないかと思われるほど長い廊下を二人で歩いているとようやく目的の部屋に辿り着いた。

「そこを右に曲がってすぐの大部屋が隊首会の部屋だ。わかったらとっとと行った。」

浦原は背中を強めに押されてよろけながら進んで行く。

そして観念したのかゆっくりと、少しずつ歩き出した。

その姿を確認して玄太郎は自室、一番隊三席の席官室へ戻ろうとする。

浦原は曲がり角に到達すると突然その場に立ち止まり振り返って玄太郎に話しかけた。

「もうボクの実力はわかったんスカ？」

玄太郎も立ち止まり振り返って浦原に向き直る。

浦原の目はさっきまでの人の良さそうな優しいものではなくなっていた。

恐ろしいほどに感情の消えた瞳で真っ直ぐに玄太郎の姿を捉えている。

玄太郎は彼の評価を改めることにした。

浦原喜助はフラフラした頼りない死神などではない、決して底を見せない要注意人物であると。

「ああ、そうだ。出来れば何の問題も起こさないでくれよ。お前は敵に回すと厄介そうだ。」

「大変っスね。一番隊三席サンの仕事も。」

「そうだな。俺みたいな尸魂界始まって以来の天才じゃないと務まらないと仕事だろうな。」

険しい表情からまた自信満々の笑みに変化した玄太郎の顔が急にへこむ。

玄太郎はうめき声をあげながらうずくまった。

浦原は何が起こったのか分からず玄太郎に駆け寄る。
すると浦原の背後によく知る霊圧が一つ現れた。
「おう、喜助！なんじゃか天才という言葉が聞こえた気がしたのじゃが気のせいかの。」
「多分今、夜一サンが蹴りました。」
「はて、何を蹴ってしまったのじゃろう。」
夜一はとぼけて倒れている玄太郎を何度も何度も踏み潰す。
踏み潰される度に玄太郎の悲鳴が聞こえる。
最初は大きな悲鳴だったが徐々にその声は小さく弱々しくなっていく。
この苦しみを知っている浦原はさすがに玄太郎が可愛そうになり救出する。
玄太郎は鼻をさすりながらヨロヨロと立ち上がった。
「やあやあ夜一ちゃん。今日もいつも通り可愛いな。勢い余って俺にぶつかってしまうくらい俺に会いたかったのか。なんとも可愛いな！大丈夫だ俺はどこにも行かない。さぁ俺の胸に飛び込んできな……いダダダ!?」
玄太郎はまくし立てるように言葉を発しながら夜一に飛びついたが夜一は玄太郎の鳩尾めがけて蹴りをいれる。
玄太郎はうめき声をあげながら再びその場にうずくまった。
「そ、そんなに恥ずかしがらなくてもいいんだ……ぞ。」
「行くぞ喜助。」
夜一は玄太郎を無視して呆然と立ち尽くしている喜助を引っ張りながら隊首会の部屋へ向かって行った。
「大丈夫なんスか？玄太郎サン。」
「ダメじゃろうな。あのバカはどうやったって治らん。」
玄太郎は他の一番隊隊士たちに抱きかかえられながら自室に戻って行った。
抱きかかえていた隊士たちが特に慌てていないのを見るとこれが日常なのだとわかり、浦原は改めて玄太郎を只者ではないと思った。

ーーー　八番隊隊舎　ーーー

浦原喜助が十二番隊隊長に就任した翌日、滝玄太郎は彼の表の仕事『定例報告』を聞きに八番隊隊舎にいた。
定例報告とは月に一回行われる、護廷十三隊各隊の一ヶ月の動きを確認する滝玄太郎の主な仕事のことである。
「今日は呑んで行かないのかい？」
「呑みたいのは山々なんだが今日中にあともう一つ済ませないと、元さんに怒られるんだ。」
「おーそれは怖いね。じゃあ仕方ない、リサちゃん付き合ってくれない？」
京楽は空中に爪を突き立て軽く払った。
すると、京楽の爪によって空間が引き裂かれてその中から赤縁の眼鏡を掛けた女性が姿を現した。

「却下や！男が呑みに誘う時は大概その後にすることが目的やろ！」
自分の盗聴がバレた八番隊副隊長『矢胴丸リサ』は反省した様子など一切なくそれどころかは謎の理論で京楽に食ってかかった。
「あのね、リサちゃん。いつも言ってるけど隊首会とか、定例報告を覗くのはいけないことなんだからね。」
「好奇心旺盛なんや。エエやろ。」
「はぁ……」
京楽とリサのやり取りを無言で見ていた玄太郎は肩を落とす京楽の横を通りリサに近づく。
そしていつものように自信満々の笑みを浮かべてリサを口説こうとする。
「俺はいいと思うぞ。むっつりスケベな女。そうだな、そんなに気になるなら俺と呑むといい。何から何まで教えてるぞ。さぁ行こう！」
「お前ははよ他の隊に行けや！」
「釣れないなぁ。だがツンツンした女も悪くない。むしろそういうところがいい。気が向いたら俺の部屋に来るといい。何から何まで教

えてやるぞ！」
　玄太郎はそう言うと瞬歩を使い二人からの目の前から消えた。
「あんなんが、死神統括官ってホンマに護廷十三隊は大丈夫なんか？」
「そんなに悪く言っちゃダメだよ。ああ見えても山爺の次に古参なんだ。そしてボクの……偉大な先生だからね。」
「確かに抜かりない奴やとは思う。ただアイツが死神の規範ではないやろ。」
「そうだねぇ……リサちゃんは一つ大きな勘違いをしているね。」
「？」
　京楽はリサに一番隊三席『滝玄太郎』の話をする。
　護廷十三隊が結成されてから一度も就任している人が変わっていない地位が三つだけある。
　一つは総隊長。山本元柳斎重國は当代最高の死神としてこれまで、そしてこれからも君臨し続けるだろう。
　２つ目は一番隊副隊長。雀部長次郎は卍解を習得していながら他の隊の隊長に就任することなく生涯山本元柳斎重國に仕えることを宣言している。
　そして三つ目が一番隊三席である。滝玄太郎も三席でありながら卍解を習得している。彼の仕事は表向きは死神統括官。死神として取るべき行動、持つべき思想を提示し違反しているものを探し出して間違いを正す。これが表向きの彼の仕事である。
「表向き……？」
　ここまで聞いてリサは京楽の言い回し違和感を覚える。
「そうだよ。さすがリサちゃん、理解が早いね。死神統括官は彼の表向きの仕事。彼の本当の仕事はね……」
　まだ夜でもないのに急に辺りの気温が下がったように感じる。
　京楽の淡々とした語り口にリサは得体の知れない恐怖を感じた。
「な、なんやねん……」
「隊長格の死神の監視及び、裏切り者の処刑だよ。」
　京楽は目を細めて昔話を懐かしむように語り出した。
「最近は護廷十三隊も大分落ち着いたから、隊長が変わる理由は専ら

引退が多いよね。でもリサちゃんが死神になるちょっと前までは護廷十三隊は隊とは名ばかりの戦闘狂集団でね。反乱を起こす隊長も少なくなかったんだよね。でも護廷十三隊は発足以来ずっと山爺が取り仕切っている。……この意味がわかるよね？」

リサは先程、自分を口説いてきた男の自信に満ち溢れた笑顔を思い出す。

さっきまではその笑顔がただのナルシストのものだと思っていたが、今はその笑顔を思い出すだけで身震いが止まらなかった。

ーーー　九番隊隊舎　ーーー

八番隊を後にした玄太郎は次の定例報告を聞きに九番隊へ向かった。

「一番隊の滝だ。拳西君いる？」

玄太郎の声が聞こえると九番隊隊士たちは皆、顔を真っ青にして自分たちのしていた仕事を放り出して部屋の中に入って行ってしまった。

九番隊隊舎が静寂に包まれる。しかしその静寂はすぐに破られることになった。

ドタドタと激しく噴煙を撒き散らしながら一人の女の子が玄太郎に向かって走ってきた。

「ヤッホー、玄ちゃん。お菓子ちょーだい！」

「お！今日も相変わらず元気だな。ほら、雀部の部屋から盗んできたチョコレートとかいうお菓子だ。」

九番隊副隊長『久南白』は、文字通り怒涛の勢いで隊舎内を走って玄太郎を出迎えた。

玄太郎から貰ったチョコレートを白は目を輝かせながら口の中に放り込むと言葉にならない奇声を発してその場を転がり回った。

「おいしい～。いつもありがとう！玄ちゃん大好き！」

「俺もお前のようないつまでも子供の心を忘れない無邪気な女は好きだぞ！」

白の言う『好き』と玄太郎の言う『好き』は全く意味が違うのだが当の本人達は全く気付いていない。
「こら、白。危ないから隊舎内は全力疾走するなっていつも言ってるだろ！」
白に拳骨を食らわしながら九番隊隊長『六車拳西』が姿を現した。
「おいおい、拳西。女の子に手をあげるのはよくないぞ。女の子には優しくしなきゃ。」
「そうだそうだー！拳西のバーカバーカ。」
白はいつの間にか玄太郎の背後に隠れて顔だけ出して拳西に抗議している。
「滝さんはあんまり白を甘やかさないで下さい。こいつすぐ調子乗るんで。」
「女の子は少し生意気なくらいが可愛いんだ。」
「ホント昔から滝さんのそういうとこ変わらないっすね。おら白、お前はどっか行ってろ。」
拳西はがっくりと脱力しながら、玄太郎をを自室に招いた。
拳西の後をついて歩く玄太郎の後ろ姿を一言も発さず静かに見つめる一人の死神がいた。
「お前では秩序を保つことはできない。」
彼は誰にも聞こえないほど小さな声でぼそりと呟いた。

3話

ーーー　二番隊隊舎　ーーー

一週間かかった今月の定例報告も何の問題もなく進んでいき残すところあと二番隊と十二番隊、五番隊だけとなった。

今日はどこから行こうかと考えていた玄太郎だったが、この三つの隊の中で玄太郎が最も気に入っている夜一がいる二番隊を真っ先に選んだ。

二番隊隊舎につくと門の前で小柄な女性が玄太郎を待っていた。

玄太郎は大げさに手を振ってその女性に挨拶をする。

彼女は玄太郎の姿を確認すると元々不機嫌そうだった顔をさらにしかめて、玄太郎を睨みつけている。

「これは珍しいこともあるもんだな。まさか砕蜂ちゃんが待っててくれるなんて。そうかお前もついに俺の魅力に気づいたか。嬉しいぞ。」

「ふん、くだらん。夜一様が任務から戻ってくるまでの間お前が何かしでかさないか監視しておくよう言われているのだ。さっさとついて来い。」

砕蜂はそう言うと玄太郎のことなど見向きもせずにそそくさと隊舎の中へと入ってしまう。

「相変わらずツンツンしているな。だがそれでいい。女とは一筋縄でいかないからこそ魅力的だ！」

玄太郎は自信満々に笑うと砕蜂の後をついて行った。

「貴様に言っておくが、私はもう始解を習得した。もし今後また夜一様にちょっかいを出せばこの雀蜂の最初の犠牲者になってもらうぞ。」

「おいおい、俺が夜一に夢中で構ってやれないからって嫉妬するなよ。……まぁ、愛憎入り乱れた関係というのも悪くないな。」

砕蜂は不機嫌そうにしながらもしっかりと客人である玄太郎にお茶を出してもてなしている。

玄太郎は満足そうにそのお茶を飲み、顔色を悪くして湯呑みを静かに置いた。
これ以降、玄太郎がそのお茶を飲む事はなかった。
「だいだい貴様はなぜ夜一様にそこまで付きまとうのだ？」
「どういう事だ？」
「貴様は尸魂界中の女を見境なく口説いている。その癖、口説いた女のことなどほとんど覚えていない。覚えていないという事はつまり最初から心などこもっていないという事だ。だが夜一様との間のことは決して忘れない。貴様は夜一様にだけは何か特別な感情を抱いている。」
「よく知ってるな？」
玄太郎はニヤリと意地の悪い笑みを砕蜂に向ける。
砕蜂は一瞬何を言われているのか分からず眉を寄せるが即座に顔を赤くして反論する。
玄太郎はそれを面白がりさらに弄る。
砕蜂がとうとう激怒し斬魄刀を取り出したところで玄太郎も平謝りをし事態は一応落ち着いた。
「そうやってまた誤魔化す……」
砕蜂は拗ねたように口を尖らせる。
玄太郎はその仕草を見て可愛いところもあると心の中で微笑んだ。
「そうだな、可愛かったご褒美に少し教えてやろう。」
「そうやってお前はまた!!」
声を荒げる砕蜂など全く眼中にないように玄太郎は目を細めて神妙な面持ちになる。
砕蜂もその場の空気を感じて大人しくなる。
「あいつの音楽は一番綺麗だ。四大貴族の当主という高い地位を持ちながらその地位に溺れずに自分を持つ強さ、何にも縛られない自由奔放さ、その全てが四鳳院夜一という死神を作り上げている。……貴族がみんな夜一みたいな奴ならもっと生きやすい世の中なのにな。」
そう話す玄太郎はいつもの軽い雰囲気とは違い何かを懐かしむような、悲しむようなそんな哀愁を漂わせていた。

??

しばらくすると夜一が任務を終えて隊舎へと戻ってきた。
部屋に入り玄太郎の顔を見た瞬間に夜一は露骨に面倒臭そうな表情をする。
「会いたかったぞ夜一！……少し見ない間にまたさらに可愛くなったな。さすが俺の運命の女だ！さあ今すぐ俺の胸に……ツイダ!?」
「少し見ない間にまたバカが進行したのかの？」
いつもの如く玄太郎の鳩尾にキックを入れた夜一は疲れたようにドサっと座椅子に腰かけた。
「今日は任務で疲れておるのだ。さっさと用事を済ましてくれんかの。」
「塩対応もなかなかそそる物があるな。いいぞ！」
定例報告は何の問題もなく進んで行った。
面倒臭そうに副隊長が仕上げた報告書を、書類の山から取り出して無造作に玄太郎に渡す。
「ところでお主、一つ聞きたいことがあるんじゃが。」
夜一は咳払いをすると、彼女にしては珍しく一度かしこまり玄太郎に質問する。
玄太郎は夜一のそのわずかな変化を感じとったが、平静を装いつついつも通りに返事をする。
「なんだ夜一？お前の質問なら何でも答えてやろう。好きな女のタイプか？それとも俺の好きな料理？はたまた好きな酒の銘柄か？」
「……疲れていると言うたじゃろ。そんな下らぬ事ではない。護廷十三隊で尺八や笛をやっとる奴を知っとるかの？」
玄太郎は書類をめくる手を止めて夜一を見る。
「ただ演奏する奴ならいくらでもいるだろ。」
「ただ演奏できる奴ではない。恐ろしく上手な奴じゃ。そうじゃな、おそらく尸魂界で一番上手な奴じゃ。」
玄太郎は夜一を見つめると自信満々の笑みを浮かべて夜一に近づ

いていく。
「そうだな。ただ演奏できる奴ならいくらでもいるだが、真に演奏家と呼べる奴は一人しか知らない。」
「誰じゃ!?」
夜一は身を乗り出して玄太郎に問いかける。
玄太郎は夜一のそんな様子を見て一層笑顔になり夜一に人差し指をビシッと突き立てた。
「それは……俺だ!」
その瞬間、玄太郎の顔に夜一のキックがヒットする。
「それだけは有り得ぬ。」
「……いーやそれは俺だ。」
「なら演奏してみせろ。お主が本当に尸魂界で一番の演奏家か判断してやろう。」
玄太郎は鼻をさすりながらヨロヨロと立ち上がると、再び自信満々に笑う。
そして懐に手を伸ばしてゴソゴソと何かを取り出そうとする。
夜一は既視感のあるその仕草を見て、ゴクリと唾を飲む。
まさか本当に昨日の男がこいつなのか、このようなバカに自分は心を奪われていたのかと複雑な気持ちになる。
玄太郎は懐から手を出す。その手は何も持っていなかった。
「……いや、今はやめておこう。」
「は?……なんじゃやはり、はったりじゃったのではないか!全く緊張して損したわ!」
夜一はハハハハとわざとらしく笑った。
「今は弾くべき時ではないと思っただけだ。」
「なんじゃ言い訳か?お?見苦しいぞ!」
「というかそもそもなぜお前はそんな事を俺に聞いた。お前は音楽とは無縁の女だと思っていたんだが。」
夜一は昨日、双極の丘で出会った男の話を玄太郎にした。
話を聞き終わると玄太郎はニヤニヤと笑い夜一を見てくる。
「なんじゃ気持ち悪い。」

「その男に惚れているのか？」
「ばっ!?そ、そんな訳がないじゃろ!?」
「隠すな隠すな。恋する女は見ていて可愛い。そうだな、お前に一ついいことを教えてやろう。あと三回その男とお前が出会ったなら、その男はお前にとって運命の男だ。」
夜一は玄太郎の言っている意味がよく分からず眉をひそめる。
玄太郎はそんな夜一の様子を一切気にせず自分の世界に入って言葉を続ける。
「一度目偶然、二度奇跡、三度目必然、四運命だ。」
カッコいい台詞を決めて余韻に浸っている玄太郎を、夜一は冷めた目で見ている。
「お主……さらにバカが進行したか？」
「まぁ、そう言うな。頭の片隅にでも置いておけ。」
「ふん。バカバカしい。儂は今日、呑む約束をしておるのじゃ。用事が終わったら早く帰ってくれるかの。」

その言葉の通り、夜一とその男は今後三度会うことになるのだがそれはまだ少し先の話である。

4話

ーーー　十二番隊隊舎　ーーー

定例報告が終わり、夜一に追い出されるように二番隊隊舎を出た玄太郎は次に重い足取りで十二番隊隊舎へ向かった。

玄太郎にとって十二番隊は先月までは最も楽しみな隊であった。

曳舟が隊長のころは定例報告で十二番隊に行くと決まって『曳舟特製霊力満タンフルコース』にひよりとともに舌鼓をうっていたものだ。

しかし今、目の前に広がっているのは毒々しい液体の入った巨大な柱と怪しげな機械。

部屋は何かが腐敗したような悪臭が広がっている。

「な、なんじゃこりゃ……」

「ホンマ何やねんこれ……」

玄太郎をここまで案内してきた十二番隊副隊長『猿柿ひより』も目の前の光景にドン引きしていた。

浦原は白衣に身を包み、ジュウジュウと不気味な音を立てている試験管を片手にひよりと玄太郎の元にやって来る。

「あれ?もう来ちゃったんスか?」

「少し早く来すぎたな。待っててやるからその右手に持ってるものを置いて来い。」

「すいませんね。三席さんが実験に失敗してしまいましてその後始末でちょっとバタバタしてるんですよ。」

それまで玄太郎達ののやり取りに一切興味を示さずひたすらコンピューターとにらめっこしていた男が浦原の言葉を聞いて不機嫌そうにこちらを向いた。

その男は顔に毒々しい装飾を施していて異様な雰囲気を醸し出していた。

「何を言っているんだネ。私の理論は完璧だった。ミスったのは実験を行った君の部下たちだろう。」

その男の台詞を妨げるように下っ端の隊士達が次から次へと報告をする。

「検体Ｃが異常な細胞分裂を開始しています」
「Ｄから異常な発熱、このままでは爆発します」
「検体ＡＢの霊圧消失、完全に消し飛びました」
「検体Ｃが箱から飛び出して増殖を始めました。このままでは４２分２６秒後には尸魂界全体が検体Ｃで覆われます」

研究員たちの悲鳴にも似た報告が室内に響き渡っていた。

浦原はその報告を聞いてもなお呑気に頭をかいてのらりくらりと自分の椅子に戻っていく。

「ちょっとバタバタ……」

玄太郎は目の前で繰り広げられている惨劇を見ながら頭痛を覚える。

ーこいつは俺が処刑した方が良いのではないか？

近年稀に見る問題児を前にして玄太郎は頭を抱えた。しかしその顔はどこか嬉しそうだった。

??

検体Ｃが尸魂界を覆うことはなく結局何の問題もなく実験の後始末は終了した。

そして玄太郎は浦原達が後始末をしている間に十二番隊の定例報告に目を通していた。

浦原は顔を煤まみれにしてヘラヘラと笑いながら玄太郎のいる部屋に入って来た。

「お待たせしてしまいましたね。」

「そうだな、もう待ちくたびれてしまったよ。いつの間にかひよりちゃんもいなくなっちゃうしとても退屈だった。」

玄太郎は大げさに首を回してあからさまに機嫌が悪いことをアピールする。

浦原はそんな玄太郎の様子をやはりヘラヘラと笑いながら見ていた。
「どうでした、アタシの報告は？」
「そうだな。お前には聞かなければならない事が山程あるんだ。」
玄太郎は口角をわずかに上げて浦原に質問を開始した。
??
「技術開発局ね。正直俺には何を言ってるのかさっぱりわからない。まぁ、問題があれば雀部が何か言ってくるだろうしいいだろう。ただ……あの男は別だ。」
玄太郎はさっき会った毒々しい見た目の男を頭の中に描いた。
「涅マユリ、尸魂界きっての天才っス。技術開発局に引き入れない理由はないでしょ。」
「確かにあいつは天才かもしれない。だがあいつは『蛆虫の巣』に入っていた男だ。俺の仕事上あいつを自由にするのは看過できないな。」
玄太郎はいつもとは違い真剣な目で浦原を見る。
その玄太郎を見て浦原もさっきまでのヘラヘラした雰囲気を捨てて真剣な表情になる。
部屋中が一瞬で緊迫した空気に包まれる。
並みの隊士が間違ってこの場に入ってしまったら失神してしまうかもしれない。それほど今の二人には威圧感があった。
「大丈夫っス。あの人は確かにマッドな所もあるっスけど意外と常識はわきまえてる人っスよ。」
「……確かに俺が調査した時も同じ意見だった。しかしあいつは才能があるからこそ危険だ。いつかお前の背後から切りつけてくる可能性もゼロではない。」
「心配無用っス。その時はアタシが責任もって殺すんで。」
そう言い放った浦原からは圧倒的な強者のオーラが漂っていた。
玄太郎は一言も発する事なくじっくりと浦原を観察する。この男の底がどこにあるのかを見極めるために。
やがて一瞬にも一年にも感じる時間がたち、玄太郎は楽しそうに笑った。

「いいだろう。四十六室には俺から話を通しておこう。お前の好きにやってみろ。しかしその結果お前が元さんに楯つくことがあれば……容赦無く斬る。」
「ありがとうございます。」
この会話で玄太郎は確信する。
この男は彼が最も警戒する死神の5人目に値すると。

ーーー　五番隊隊舎　ーーー

長かった定例報告もついに次で最後。しかし玄太郎は今までのどの部隊に行く前よりも気を引き締めて五番隊の門をくぐった。
この隊には玄太郎が最も警戒している5人の死神の内3人も所属しているのだ。
一人目は五番隊隊長『平子真子』である。彼は浦原喜助と同じく飄々としていながら腹の底を決して見せない男である。浦原喜助と同じく腹の底が見えない相手を信頼することはできない。玄太郎は彼に対して最大限の注意を払っている。
二人目は五番隊副隊長『藍染惣右介』である。彼は温厚で隊士からの信頼も厚い正しく死神の規範といった男である。しかし玄太郎は彼の完璧すぎる点に違和感を覚えいる。どんな死神にも一つは欠点が存在する物である。しかし藍染にはそれがない。それは即ち藍染は誰にも本来の自分をさらけ出していないということになる。そして玄太郎は個人的に藍染の優等生キャラが嫌いだという部分もあるのだがそれは些細なことである。
そして3人目は真央霊術院を一年で卒業した天才児『市丸ギン』である。今のところ彼に目立った問題があるわけではない。しかし何もないからこそ危険なのである。天才は時として大きく道を踏み外してしまう事がある。道を踏み外した天才ほど危険なものはない。玄太郎はその事実を身をもって知っている。
「お待ちしておりました。滝玄太郎三席。」
「相変わらず硬いな君は。」

「こういう性格なもので。」
　他愛もない会話、しかし玄太郎はこの毎回行われる世間話からもこの男の素性を探ろうとしている。
　平子のいる部屋へ通されるとそこには尸魂界では聞きなれない音楽が流れていた。
「なんだか騒がしい曲が流れているな。」
「ジャズや。今、現世で流行ってる音楽や。エエやろ。」
「騒がしいな、性に合わない。」
　平子はジャズを否定されて恨めしそうに玄太郎を見ながらその音楽を止めた。
「惣右介、適当に済ましといてくれ。」
「またそんな事を言って……これは本来隊長の仕事なんですよ。」
　藍染はそう文句を言いながらも綺麗に纏められた資料の束を玄太郎の前に差し出した。
　そもそも定例報告は隊長と玄太郎の二人だけで行うべきものなのだがその辺を徹底すると報告を行ってくれない隊が出てきそうなので玄太郎も見逃しているのである。
　玄太郎はしばらく無言で資料に目を通す。　いつも通り綺麗な字で完璧にまとめられた報告書である。
　平子はニヤリと意地の悪い笑みを浮かべると、レコードの円盤を取り替えて再び針を落とす。
　たちまち部屋にギターとドラムの乱れるロックの曲が流れる。
「うっせーぞ!!早くその音楽止めろ!」
「ホンマ難儀なやっちゃな。」
「俺はうるさい音楽が大っ嫌いなんだ。」
　平子は渋々レコードを止めて、椅子に座る。
　そして独り言のようにブツブツと文句を言う。
「逆にお前の演奏なんて静かすぎて寝てまいそうになるわ。」
　平子の言葉に玄太郎がピクリと反応する。
「俺の演奏が静かすぎるだと……?」
　藍染はやってしまったと言う表情で頭を抱える。

一方の平子は餌に獲物が食いついたと言わんばかりに嬉しそうに笑う。
「笛一本の演奏なんか眠くてしゃーないわ。」
鼻をほじりながら挑発するように言う平子を見て玄太郎の体が小刻みに震え出す。
玄太郎は懐から青色の両手より少し長い棒を取り出す。
「これは笛じゃない、尺八だ！」
「んなもん大体一緒やろ。」
「ぜんっぜん違うわ！いいだろうそこまで馬鹿にするならお前らに俺の演奏を聴かしてやろう！そうだな今日は満月だったな……お前ら全員屋根に来い！」
玄太郎は言い終わるとその場から姿を消す。
「惣右介……」
「何ですか？」
「今日、卯ノ花隊長から貰った団子あったな？」
「はい。」
「全部持って屋根に集合や！」
平子は子供のようにはしゃぎながら部屋を出て行った。
取り残された藍染は一つため息をついて団子を取りに自室へ向かった。

ーーー　八番隊隊舎　ーーー

八番隊隊舎の屋根の上で白羽織を着た三人の死神達は酒を煽っていた。
彼らの周りには大量の空になった徳利が散乱していた。
「たまには月の下で呑むのも悪くはないね。」
「風情があるっスね。」
「お主に風情がわかる心があるなんて驚きじゃ。」
夜一はそう言うとゴクリと酒を飲みガハハハとオヤジのように大笑いした。

「アタシは夜一さんに風情をわかる心があるとは思えないんスけど……」
「何を言うとる、儂と京楽は貴族出身じゃ。雅を絵に描いたような存在じゃろ。」
そう言うと夜一はまた酒をゴクリと飲み干して空になったのを確認して放り投げた。
浦原はその様子を苦笑しながら見ていた。
こんな調子で宴は続いた。
夜も更けそろそろお開きにしようかとなっていた時に彼らの耳に尺八の音が響いてきた。
「これは中々、風情があるじゃないか。」
京楽は酒を直そうとした手を止めてまた一杯酒を注いで口に運んだ。
「これって夜一サンがこの前言ってた……」
「……二度目じゃ。」
浦原と夜一が顔を見合わせているのを見て、京楽も興味を持つ。
「この曲がどうかしたのかい?」
「夜一サンの初恋なんスよ。この曲の演奏者が。」
「何を言っとる!?そんな筈がないじゃろ!儂は風情を感じておるのだ。決して恋などではない。」
顔を赤くして訂正する夜一、果たしてこの赤さは酒のせいなのかそれとも……
「君達はこの曲の演奏者が誰か知らないのかい?」
「知ってるんスか?」
夜一は身を乗り出して京楽に詰め寄る。
普段は決して見れない夜一の一面を見れて京楽は少し得した気分になった。
そしてゆっくり残りの酒を飲み干して一息つき散々勿体ぶって口を開いた。
「この曲はね……」
「「……」」

夜一と浦原は息を飲んで続きを待つ。
「僕も知らないんだよね～。」
夜一と浦原は同時にずっこける。
「知らないんスか？」
「ごめんね～。夜一ちゃんがあまりにも可愛かったからからかってみたくなっちゃってね。」
京楽はそこまで言うと背中から恐ろしいほどの殺気を感じ取って寒気を感じる。
酔いなど完全に冷めてしまうほどの凄まじい殺気を感じて京楽は身震いをする。
「胸毛を全てむしりとればええかの？」
「リサちゃんみたいな事言わないでよぉ……」
京楽は頭をかいていたかと思うとその場から突然消え去った。
「この瞬神夜一から逃げられると思うなよ。」
夜一も赤い顔を嬉々とした笑顔に染めて後を追うようにその場から姿を消した。
取り残された浦原だけが月夜に響く尺八の音に耳を澄ましていた。

この時点ではまだ夜一と玄太郎はたまたまその場に居合わせたに過ぎない。
彼らの数奇な運命はまだ始まってすらいないのだ。
彼らの運命が動き出すのは四度彼らが出会った時、今から１０９年後の話である。

過去編
5話

ーーー　二番隊隊舎　ーーー

浦原が十二番隊隊長に就任してから九年がたった。
その間特に大きな事件もなく尸魂界は平和そのものであった。
死神にとって九年と言う時間は大して長い時間では無い。
護廷十三隊の者たちにも大きな変化があった者はおらず九年前と変わらない毎日を送っていた。
「なぜお主がここにおる?」
任務から帰って来た夜一は二番隊の女性隊士を口説いている玄太郎を見つけうんざりしていた。
「おぉ、夜一。お前は運命の女だ。さ!今すぐ結婚しよう。」
「寝言は寝て言うのじゃ。」
玄太郎の顔に足がめり込む。
この光景もここ九年間変わらないやり取りであるため周りの隊士たちは少しも驚く様子もなく淡々と作業を続けていた。
玄太郎は何事もなかったかのように軽く飛び起きると、二番隊の隊長室へ向かって一人で歩き始めた。
「おい、勝手にどこに行く?」
「仕事だ。ついて来い。」
玄太郎は振り返るといつものように自信満々の笑みを浮かべて言い放った。

ーーー　二番隊　隊長室　ーーー
「なるほど、魂魄消失事件か……」
「そうだ。文字通り魂魄だけが消えるらしい。」
玄太郎の話を聞き夜一は即座に調査隊のメンバーを考える。
ーー副隊長の大前田と、経験を積ませる意味もこめて砕蜂かの。

「おいおい、はやまるな。二番隊はまだ何もしなくていい。現地調査には九番隊を向かわせるつもりだからな。」
「そうなのか？じゃがならなぜわざわざ直接言いに来たのじゃ？ただの連絡なら地獄蝶を使えば良かろう。」
「そりゃ～、夜一ちゃんに会いたかったから……イタ!?」
例の如く玄太郎の顔に夜一の拳がめり込む。
鼻をさすりながら『いつも通りいいパンチだな』などと呑気に話していた玄太郎を夜一は睨み声を小さくして問う。
「それで本当は何が目的じゃ。」
「……全く釣れないな。夜一に会いたかったのは本当だがもう一つ目的があってな。……忠告しに来た。」
「忠告……じゃと？」
玄太郎はいつもの人懐っこい笑みを消して、夜一にしか聞こえない程小さな声で言った。
「五番隊の連中と……浦原には注意しとけ。」
夜一は玄太郎の言葉を聞き鋭い目つきで玄太郎を睨んだ。
隊長室には雷の如き激しい霊圧で満たされる。
規格外の霊圧に晒されながら玄太郎は余裕の笑みを浮かべて夜一の肩を叩く。
「可能性の話だ。お前と浦原の関係は知っているだがその信頼は時に盲信に繋がる、注意しとけ。」
「お主の忠告など必要ない。」
夜一は吐き捨てるように言った。
「お主と話すことなど何もない。早く立ち去れ！」
夜一の怒鳴り声を聞いて玄太郎は肩をすくめると素直に隊長室から出て行こうとする。
玄太郎はふと夜一の机にある紙に目がいった。
それは現世で言うところカレンダーというものであった。
そのカレンダーには定期的に赤い丸が打たれていた。
丸の付いている日はどれも満月の日であった。

ーーーこんなに想われているというのはやはり嬉しいものだな。

九年間で変化したことは特になかったが新しく生まれたものはあった。

その内の一つが四鳳院家の当主の想い人という噂話である。

夜一は本来せっかちな性格であるため次その男に会った時には意地でも捕まえると意気込んでいた。

しかし満月の夜、京楽と浦原と呑んだ時に演奏を聴いて以来、一度もその男が夜一の前に姿を現す事はなかった。

高貴な貴族でありながら、類い稀な死神の素質も持ち合わせていた夜一は今まで欲しいと思ったものはなんでも手に入れることが出来た。

しかしどうしても手に入れることが出来ないその男のことを夜一は自分でも知らない内に思い焦がれるようになっていた。

普段から仲のいい浦原から何度もそれは紛れもなく恋だと言われたにも関わらず夜一はそれを頑な認めようとはしなかった。

男性隊士の間では男勝りな夜一の乙女な一面として大層人気な噂話である。

しかしほとんどの隊士にとってはただの噂話に過ぎずこの噂が本当であることは一部の隊長格しか知らず、さらにその相手が玄太郎であることを知る人物は平子と京楽くらいのものである。

夜一のカレンダーを見た玄太郎はニヤリと気持ちの悪い笑みを浮かべて足取り軽く部屋を出て行った。

ーーー　一番隊　隊長室　ーーー

玄太郎が隊首室に入ると、そこには既に一番隊副隊長『雀部長次郎』が待機しており、山本元柳斎と険しい顔で玄太郎を睨め付けた。

「遅いぞ、玄太郎よ。」

「俺は常に尸魂界を飛び回っているんだ、そんなすぐに戻ってこれる

わけがないだろ。」
玄太郎は大して反省をしている様子もなく、二人に近づいていく。
山本にこのような接し方が許されているのは尸魂界で玄太郎だけである。
雀部はため息をついて玄太郎をたしなめる。
「砕蜂さんから二番隊の女性隊士たちを口説いていたという報告がさっき届いたのだが。」
「ウゲッ!?砕蜂告げ口しやがったのか。でも京楽が二番隊の子は押しに弱いって言ってたからやったんだ。あいつが悪い！」
「京楽の教育をこいつに任せたのは間違いだったか……。」
雀部は突然出てきた後輩の名前を聞き、泣き出しそうな顔をする。
そんな二人のやり取りをしわがれた細い目で見ていた山本はおもむろに口を開く。
「玄太郎と京楽の女好きはもう諦めておる。」
護廷十三隊で山本とこのように砕けた話ができるのは１０００年以上の付き合いになる雀部と玄太郎、そして山本の愛弟子京楽と浮竹くらいのものである。
「それでこ度の魂魄消失事件、お主らはどう見る？」
先ほどまでの和気藹々とした雰囲気は影を潜め緊張感を含んだ空気が場を支配する。
「私の調査では新種の虚の可能性もありますが今のところ虚と断定することはできません。」
「うむ、死神の犯行の可能性もあると。」
「今月の定例報告で特に怪しかった奴はいなかった。もう少し情報がないとなんともできないという感じだな。」
山本は二人の報告を聞きただでさえ細い目をさらに細めて考え込む。
玄太郎と長次郎は言葉を発することなく山本の次の言葉を待つ。
「こ度の件、いささか気になる点が多いの。調査隊を派遣することにする。派遣する隊は玄太郎の判断に任せる。」

6話

ーーー　一番隊隊舎　ーーー

満月の綺麗な夜、いつものように何も起こらない平和な夜が訪れると護廷十三隊の誰もが思っていた。

しかしそのはかない幻想は瀞霊廷に異常を伝える警報音によって打ち砕かれた。

白羽織を着た十一人の死神たちがその警報音を聞き一斉に一番隊隊舎に向かって移動を開始した。

最初に警報音が鳴ってから五分、一番隊隊舎には既に十一人の隊長たちが揃っている。

そして最初の警報音が鳴ってから丁度六分がたった時、十二人目の隊長、浦原喜助が息を切らしながら登場した。

山本は視線だけで浦原に早く整列するように促す。

浦原は慌てて列に加わる。

浦原がまだ息を切らしている中、隊首会が開始された。

「知っての通り、魂魄消失事件の調査に向かった九番隊隊長と副隊長の霊圧に異常が発生した。昨日までこの件はただの流魂街の事件に過ぎなかったが今は違う、護廷十三隊の威信をかけてこの件に対応する。」

隊長達は皆真剣な面持ちで山本の言葉を聞いている。

隊首会が始まってからずっと切迫詰まった様子である浦原が山本の言葉を遮り手を挙げた。

山本の射殺すような視線を受けても臆することなく進言する。

「ボクが現地に調査に行きます。」

「ならん。」

浦原の提案は一瞬で却下される。

浦原以外の隊長たちは予想していた展開だったのか、それとも山本の圧力に恐怖しているのか顔色ひとつ変えない。

浦原は一瞬何を言われたのかわからず動きを止めたがすぐに正気

を取り戻し山本に嘆願する。
「ボクの副官が現場に向かってるんス！」
「喜助！」
夜一が険しい表情で浦原を咎める。
浦原は夜一の言葉で我に帰ると辛うじて感情を抑えられるようになった。
夜一は先に隊長になった先輩として古くからの親友に助言する。
「情けないぞ取り乱すな！自分で選んで行かせた副官じゃろう！お主が取り乱すのは其奴への侮辱じゃというのが解らんか！」
夜一の説教を聞き浦原は押し黙ると一歩下がり列に戻った。
その様子をいつものようにニヤリと聞いていた京楽が励ますように浦原の肩に手を置く。
「そんなに心配することはない。既に現地には玄ちゃんが向かってるんだ。」
「玄太郎三席がですか……？」
「そうだよ。何年ぶりだろうね、彼が剣を振るうのは。」
京楽は何か遠い過去を見るように目を細める。
京楽の言葉を聞いて浮竹や卯ノ花、古くから隊長を務めてきた者達の表情が少し変わる。
ある者は何かに怯えるような恐怖を、ある者は嫉妬にも似た怒りの感情をそれぞれの胸に抱いていた。
「……そう心配そうな顔をしなさんな。信じて待つのも隊長の仕事だよ。」
京楽はいつものように影のある笑みを浮かべて隊列に戻った。
浦原によって乱された隊首会の空気が山本の一言によって再び引き締められる。
「これより各隊長に今後の命令を下す。皆心して聞くように。」

ーーー　流魂街・森　ーーー

九番隊からの救援要請を受けて九番隊のキャンプへ向かったひよ

りだったが時既に遅し。
キャンプには無数の死体が転がっていた。
ひよりは周囲の状況を確認する間もなく背後から奇襲された。
咄嗟に斬魄刀を抜きその攻撃を受け流せたのはひよりの培ってきた長年の死神としての本能のおかげである。
相手の奇襲を退けた。
本来ならひよりが相手よりも精神的に優位に立てる状況のはずだ。
しかし相手よりもひよりの方ひどく動揺していた。
そんなひよりの様子など全く気にせず相手はひよりに斬りかかる。
ひよりはひたすら攻撃を受け流すだけで決して自分から攻撃を仕掛けることはない、正確には仕掛けることができないのである。
徐々にひよりの体に傷が増えていく。
最初は無視できる軽い傷だったが段々と傷が深くなっていく。
それでもひよりが反撃することはない。
受けた傷は痛みという形で徐々にひよりの体を蝕む。
痛みはやがてひよりの判断をほんの少しだけ遅らせることになる。
時間にしてわずかコンマ数秒。しかしその遅れが致命的なものとなってしまう。
ーーアカン、間に合わへん
ひよりの体は敵の斬撃によって縦に真っ二つに斬られるはずだった。
しかしその刃はひよりには届かなかった。
相手は目の前に現れた新たな敵を警戒して一度距離を取った。
「いつものじゃじゃ馬っぷりはどうした。」
ひよりが霞む目で前を見るとそこには見慣れた一人の男の姿があった。
「なんでここにおんねん、ハゲ。」
「お前こそどうした？柄にもしおらしくなっちゃって。まぁいつもと違うしおらしいお前も可愛いけどな……。」
「……」
いつもならここで蹴りをいれるところだが生憎今のひよりにはそ

の力すら残っていなかった。
求めていたツッコミが来なかった玄太郎はつまらなそうにはひよりに背を向ける。
「ツッコミも入れられないほど消耗してるようだな。仕方ない、その辺で隠れとけ。」
玄太郎はそう言うと剣を構えて獣のような奇声を発している相手と対峙する。
ひよりに斬りかかっていたのは玄太郎が最も裏切る可能性が低いと考え信頼して派遣した男だった。
しかしその姿はいつもの姿とは大分異なっていた。
体の半分以上が虚のような見た目をしていてもはや一目では彼が死神なのか虚なのか判断ができない。
ひよりがふらつきながら玄太郎に摑みかかる。
「あんた、相手が誰かわかっとんのか?拳西やぞ。」
「だからどうした?」
普段の玄太郎からは想像もできないほど冷たい声にひよりは恐怖を覚えて少し離れる。
それでもなおひよりは震える手で玄太郎を止めようとする。
「隊士須らく護廷に死すべし、護廷に害すれば自ら死すべし。真央霊術院で習っただろ。」
「せやけど……」
「いい機会だ、おれの本当の仕事を教えてやろう。俺の仕事は死神統括官、護廷に害しながら死ぬことができなかった憐れな隊士をその苦しみから解放してやる事だ。」
玄太郎はそう言うとひよりの腹に拳を入れて気絶させた。
玄太郎はひよりを抱えて少し離れた木に寄りかからせると再び拳西の前へ戻ってきた。
「待たせて悪かったな。お詫びに最高の音楽を聞かせてやろう。」
玄太郎は刀を自分の顔の前に持って行くと静かに己の斬魄刀の名を呼んだ。

「威を示せ音姫」

玄太郎の周りから大量の霊圧が放出される。

もし一般の隊士がその場にいれば、失神して倒れてしまうほど高密度の霊圧がその場を支配した。

始解した玄太郎の斬魄刀に目立った形状の変化は見られなかった。

形状は一般隊士が使う浅打と何ら変わらない。しかし様々な部分が普通の浅打とは異なっていた。

玄太郎の持つ斬魄刀の柄は鮮やかな青色だった。そしてその刀身は等間隔で親指大の小さな穴が空いていた。

目の前の強大な敵を前に理性を失った拳西は虚のような声をあげながら玄太郎に斬りかかった。

玄太郎は片手で拳西の斬撃を受け止める。拳西と玄太郎の斬魄刀がぶつかり合い激しい金属音を放つ。

その金属音を拳西が聞いた時、彼の全身に無数の切り傷が生じた。

「ウガガガガガガガガガガ」

拳西は言葉にならない悲鳴を上げて玄太郎から離れる。

玄太郎は斬魄刀をブンブンと回し自信満々の笑みで拳西の様子を観察する。

「いい音楽とは人の心を惑わせるとよく言われる。だが千年に一人の天才の俺の音楽はその程度じゃ済まない。俺の音楽を生半可な覚悟で聴くと火傷するぜ。」

拳西は正面から斬り合うのは危険と判断したのか左手で玄太郎の斬魄刀を押さえにかかった。

玄太郎はその攻撃をあらかじめ予測していたのか軽い身のこなしで躱すと、拳西の懐に入り斬りつけようとする。

しかし玄太郎が踏み込むと同時に背後から何者かが白打を試みる。

玄太郎は咄嗟にそれを受け流し一旦拳西から離れる。

拳西をかばうように立つ少女はやはり玄太郎がよく知る人物であった。

「悪いな今日はチョコレートは持ってないんだ。」

「……」
白も拳西と同じく体の半分以上は虚のような見た目になっており明らかに理性が残されていないことが見て取れる。
玄太郎は表情を一切変えずにまた斬魄刀を構える。
玄太郎の背後から三つ目の巨大な霊圧が突如発生する。
玄太郎は驚いて振り返ると先程気絶させたはずのひよりが立ち上がっていた。
そしてその顔には虚のような仮面が付いていた。
「隊長格が揃いも揃って仮装パーティーか!?」
玄太郎は斬魄刀で地面を無造作に叩く。
音姫から鈍重な音が森に響き渡った。

7話

ーーー　瀞霊廷　西　ーーー

今日起こった魂魄消失事件の詳細は不確定要素が多いという理由で三席以下一般隊士には通達されなかった。

しかし流魂街から発せられる規格外の霊圧を感じて一般隊士は皆、今回の魂魄消失事件がただ事ではなくなっていることを感じ取っていた。

「なんたってこんな見回りに隊長三人も派遣されてんだ？もうちょっとバラけさせればいいのに。」

「総隊長の決定なんだ。僕達は従うしかない。」

特大のアフロとサングラスがトレードマークの七番隊隊長『相川愛』通称『ラブ』は三番隊隊長『鳳橋桜十郎』通称『ローズ』と十二番隊隊長『浦原喜助』と共に精霊廷の見回りをしていた。

「にしてもおっかねーな。こんなに離れてんのに肌がピリついてくる。」

ラブは先程から尸魂界中に伝わる強大な霊圧を感じて身震いをする。

「これじゃ、異常事態ですって精霊廷中に宣伝してるみたいだな。」

「滝三席ってホントに強かったんスね。」

隊首会では大きく取り乱していた浦原だったが隊首会が終わるといつもの飄々とした様子に戻っていた。

ローズは目を細めながら空を眺めた。

「間近で見るともっと凄いよ。それこそ、総隊長に匹敵する程にね。」

「実際に見たことあるんスか？」

浦原が目を丸くして聞く。

「あれはもう何年前だ？八代目の剣八が反乱を起こしたのは。」

「僕たちが席官になった頃だから大分前だね。」

世間話をしながら呑気に歩いていたラブは突然浦原の肩に手を置き強く引き寄せる。

「わかったらもう俺らの隙を狙って抜け出そうとすんなよ。」

ラブが浦原を睨みつけるように言うと、浦原は困ったように乾いた笑い声をあげた。
「バレちゃってましたか？」
「バレバレだよ。君からは焦りの音楽しか聞こえない。」
「ひよりを信じてやれ。あいつは手のかかる奴だが簡単に死ぬような玉でもねえ。ちっとはあいつを信じてやれ。」
「……はいっス。」
その実ラブもローズも拳西と白の状態が心配じゃないわけではない。
しかし現場に向かったのは護廷十三隊で最も強い男である。
二人は玄太郎の戦いを一度この目で見た事があるからこそ平常心でいられるのである。
そのとき三人の足が急に止まる。
三人は精霊廷の東で突如大きな霊圧を感じった。
三人にはその霊圧は強力な虚のように感じた。
しかし三人はその事実をすぐには受け止められなかった。
何故ならそんな事は本来あり得ないのである。
尸魂界は殺気石より生じる霊体を遮断する膜『遮魂膜』によって守られており虚が中に入る事などあり得ないのである。
ローズとラブの考察はここで止まる。
しかし尸魂界一の頭脳を持つ浦原は自身の研究の中から一つの可能性に思い当たる。その研究は浦原自身が研究しながら余りの危険性から中止にしたものである。
思考の海に溺れていた浦原は自分の前を歩く二人の隊長の異変に気付き現実に引き戻される。
突然、ローズとラブの歩みが止まる。
浦原が疑問に思い二人を見ると目の前に広がる光景を目にして驚くとともに一つの確信を持った。
虚は最初から精霊廷内にいるのだと。
顔に虚のような仮面を付けたローズとラブは言葉にならない声を上げて浦原に襲いかかった。

ーーー　瀞霊廷　東　ーーー

「満月の夜じゃな……」
尸魂界を薄く照らす満月を眺めて夜一は小さく独り言を呟いた。
夜一は月の綺麗な夜になると、こうして空を見上げ物思いにふけるクセができてしまっていた。
九年たっても夜一は双極の丘で見た男の姿を鮮明に覚えていた。
「いやはや。こんな日は呑気に酒でも呑んでいたいね。」
「アンタはいつでも酒飲んどるやろ。」
満月の夜に恋い焦がれる女という風情のある空気を京楽とリサがぶち壊すように会話をする。
「何でお前は副隊長のくせに隊長に対してそない口の聞き方すんねん。」
「こいつは隊長やない。髭や。」
「ひどいなリサちゃん～。」
京楽は突然リサを掴み壁へ向かって投げ飛ばした。
大きな煙を上げてリサの姿が見えなくなる、しかし壁に大きなヒビが入っており相当強い力で投げたことがうかがえる。
「何しとんねん!?いくらリサが無礼やからって……」
京楽はいつもの影のある笑みを無くし、無表情で刀に手をかけた。
「何言ってるんだい、彼女は敵だよ。」
京楽は煙が晴れ切る前にリサに突進し斬りかかる。
激しい音とともに壁が完全に崩壊する。
煙の中から二つの影が左右に分かれて飛び去る。
一人はいつもの女物の着物を脱ぎ、白い隊長羽織姿となった京楽。
もう一方の影はその副隊長、しかしその顔には虚のような仮面が付いている。
「何やあれ!?」
「いまはどうでもよい。後で喜助辺りが調査するじゃろう。今は此奴を止めるのが先……!?」

夜一の言葉が言い終わる前に平子が夜一に向かって刀を振るう。
間一髪のところで交わした夜一だったが、その額には小さな切り傷が出来ていた。
「何をしよ……」
夜一は平子の顔を見て驚愕する。
平子は顔に張り付いた虚の仮面を押さえつけながらもがき苦しんでいる。
平子は切羽詰まり怒鳴るように夜一に言う。
「はよ殺せ。俺が押さえつけとる間に。」
夜一は無言で隊長羽織を脱ぎ捨て肩と背中が大きく露出した服装になる。
夜一の体から高濃度の霊圧が放出される。
「気をつけるのじゃな。これは手加減が効かんのでのう。……瞬閃！」
夜一は平子の仮面目掛けて霊圧を纏った拳を振り上げた。

ーーー　流魂街・西　ーーー

白が先陣を切って玄太郎に突っ込んでいく。
玄太郎は白の射程圏内に入る前に指を突き立てて霊圧を放出する。
白は回避行動を取ることなく突っ込み体中を炎で包まれる。
獣のような悲鳴を聞きながら玄太郎は得意げに説明する。
「すごいだろ。お前らで言うところの詠唱破棄みたいなもんだよ。」
「……」
玄太郎が放ったのは破動の三十三『蒼火墜』である。
しかし玄太郎の中ではその認識はない。
玄太郎からしてみれば霊圧を炎の形で放ったに過ぎないのである。
「鬼道なんて大層な名前が付けられちゃいるが、とどのつまり霊圧を好きな形で放つ。それだけの事だ。まぁ、それじゃあ万人が使えるものにはならないってそれらを体系化させた奴らがいた。それが今の鬼道衆の始まりってわけよ。」

「……」
何を話しても全く反応のない三人に気分を悪くしたのか玄太郎は腹立たしそうに音姫を地面に叩きつける。
その音が拳西たちに届くと浅い切り傷が全身にできる。
「歴史の授業も終わったところでそろそろ始めるか？」
今まで決して自分から仕掛けることはせずに受け身に徹してきた玄太郎が始めて動いた。
拳西たちには既に理性と呼ばれるものは残っていなかったが本能の部分で身の危険を感じ取った。
太刀筋が複数見える、それほどに早い玄太郎の斬撃がひよりの胸元に襲いかかった。
虚化により死神の限界を超えて強化された反応速度で辛うじてその斬撃を受け止める。
金属と金属がぶつかり合う甲高い音がこだまする。
ひよりの右手に斬魄刀で斬られたように深い傷が生じた。
痛みで右手の力が弱まったひよりはいとも簡単に弾き飛ばされ木に突っ込んだ。
激しい音と共に噴煙を巻き上げてその中心にいるひよりの記憶はそこで完全に途切れた。
玄太郎は一息つく暇もなく次なる攻撃に見舞われる。
拳西が背後から渾身の力を込めて拳を振り上げた。
数の有利を失った今、拳西の勝機はひよりが命がけで作った一瞬の隙をついて一撃で倒す、それだけだった。
攻撃に反応した玄太郎が振り返り受け止めようとする。
振り返った玄太郎の顔には焦りの色は一切なく絶対的な自信が見え隠れしていた。
玄太郎は拳西の拳を左手一本で受け止めた。
行き場を失った霊圧が炸裂し、玄太郎と拳西の立っていた地面を破壊した。
その穴の大きさから拳西の拳の強さが一目で見て取れた。
「夜一の脚の方が百倍効いたな。」

玄太郎はゆっくりと斬魄刀を持ち上げて斬りつけようとする。
拳西は回避しようとするが体が一切動かない。
玄太郎の左腕ががっちりと拳西を捕まえて離さないのである。
回避することすら許されない拳西はあっけなく玄太郎に斬られる。
上半身から大量の血を流してその場に崩れ落ちた。

8話

ーーー　流魂街・西　ーーー

玄太郎は小さくため息をもらすと刀をグルグルと回してながら誰もないない暗闇に向かって声を発する。
「コソコソ隠れてないで出てきたらどうだ？」
玄太郎が呼びかけると森の暗闇から人影が一つ浮かび上がった。
ドレッドヘアにゴーグルという特徴的な見た目の死神が玄太郎の前に現れる。
「えーと……誰だっけ？」
「東仙要、九番隊五席。」
名前を聞いても未だに思い出せていない玄太郎を見ても大して気を悪くした様子はない。
「救援ありがとうございます。」
「礼には及ばない。」
玄太郎は淡々と東仙に応じる。
「お前はこいつらの状態がわかるのか？」
玄太郎は東仙に背を向けて倒れて動かなくなった拳西たちの様子を伺っていた。
東仙は心の中でわずかに興奮を覚えた。
ーーー油断している今ならやれる。
東仙は斬魄刀を持つ手に力を込めて斬りかかろうとする。
しかしその刀は東仙の思いもよらない人の手によって遮られた。
「何をしようとしているんだい、要？」
「も、申し訳ございません……！」
東仙の斬魄刀を指先でつまんだ藍染が突然姿を現した。
「何でお前がここにいる？」
玄太郎は瞬時に警戒レベルを上げて藍染と間合いを取った。
突然目の前に現れた死神の姿を見て剣呑な目で睨む。
「容赦が無いですね。滝三席。」

黒縁の眼鏡が特徴的な男、藍染惣右介はいつものように丁寧な言葉遣いで玄太郎に話しかける。
しかしその視線にいつもの暖かさはなく、ゴミを見るような目で玄太郎の周りに倒れる三人の死神を見ていた。
普段の藍染を知っている人からしてみれば想像もできないような冷たい目を見て玄太郎は何故か楽しそうに口角を上げた。
「ようやく正体を現したな、藍染。」
「あなたにはこの程度の雑兵が三体束になったところで意味はなかったようですね。」
玄太郎は無造作に斬魄刀を回すとそのまま勢いよく地面に叩きつけようとする。
「やらせるか。」
東仙が玄太郎の行動を予測し、斬りかかる。
玄太郎は咄嗟に飛び去り、その斬撃を回避した。
「お前の刀から発せられる音に霊圧を乗せる。そして音が耳に届いた時には霊圧の刃が相手を切り裂く。そんなところだろう。そう簡単に使えると思うな。」
「ほう、中々耳がいいようだな。正解だ。」
玄太郎は東仙を挑発するように言う。
東仙の顔からは一切の感情は読み取れない。
しかし彼の放つ霊圧は徐々に大きくなり玄太郎を威嚇する。
両者は一歩も動かない。
その間東仙は頭の中で何百通りもの攻撃パターンをシュミレーションする、瞬歩で背後に回り斬る。正面で一回払い、そこを突く。
しかしシュミレーションする度に頭に浮かび上がるのは玄太郎に殺される自分の姿だった。
東仙は悔しそうに唇を噛む。
その様子を見て藍染が小さく諭すように言った。
「分かったかな。今の私達では彼を倒すことは出来ない。」
「そやなぁ。隠れて見てたけどホンマに強いわ。この人。」
藍染を庇うように前に立った市丸ギンがキツネのように細い目を

さらに細めて玄太郎を見ていた。
ギンは何かを期待するようなそんな目で玄太郎を見ていた。
「今は……だと。その言い方だといつか勝てるみたいな言い方だな。」
藍染は眼鏡を取り、そして髪をかきあげて全ての生物を見下したようなそんな傲慢さを感じさせる表情になる。
「そうですね……百年もあれば私はあなたに追いつき、そして決して埋まらない程の差をつけられると思っています。」
藍染の表情からは絶対的な自信がうかがえる。
玄太郎は斬魄刀を上段に構えて斬りかかる体勢を整える。
「残念だな。その１００年後は永遠に訪れない。」
玄太郎の言葉を聞いて藍染は眼鏡をあげて凶悪な笑みを浮かべる。
藍染は刀を抜くことはなく己の霊圧も限界まで抑えることで戦う意思がないことを示す。
「私はあなたと戦うためにここにきたのではない。あなたと交渉しにきたのです。」
「交渉？」
「そうです。あなたはこのまま死神の枠に留まったままでいいと思っているのですか？」
玄太郎は無言で藍染の言葉を聞いている。
淡々と話していた藍染はやがてその声に熱を帯び始める。
「死神は斬、拳、走、鬼の四つの戦闘技能を駆使して戦う。しかし実力のあるものはやがてその限界に達することになる。あなたは気づいているはずです。斬、拳、鬼どれをとってもあなたは護廷十三隊で最高の水準にある、しかし走だけは並みの隊長クラスだ。それがあなたの死神としての限界です。」
「……何が言いたい？」
「見たくはないのですか？死神の限界を超えたその先を。あなたほどの才能があれば今の状態ではとても満足できない筈です。死神を超越したその先を知りたくはないのですか？」
藍染は一通り言いたいことを言い終えたのか黙って玄太郎の返事を待った。

玄太郎はやがて顔を上げるといつものように自信満々の笑みで言い放った。
「化け物になって全てを手に入れるくらいなら満ち足りない死神でいるほうがまだマシだ。」
「……そうか残念だ。」
先程までは表面上敬語を使って、玄太郎を敬っていた藍染だったが交渉が決裂するやいなや即座に傲慢さが前面に出て行く。
「せいぜい死神としての生を楽しむといい。」
藍染の言葉と玄太郎が大きな霊圧の爆発を複数感じたのは同時のことだった。
玄太郎は驚いて即座に霊圧の方向を探る。その爆発は精霊廷の方向から発生していた。
「早く行った方が良いのではないかな。」
藍染達はまるで空気に溶け込むようにその場から消え去った。
玄太郎は地面を蹴り音を発生させる。
藍染達がこの場から消えたことを確信し、始解を解いた。
そしてこの場に新たに現れた男の到着を待った。
「滝殿、お待たせしました。」
「鬼道衆総帥・大鬼道長が何でこんなところにいるんだ?」
青い衣装に身を包んだ大男、握菱鉄裁が息を切らせながら玄太郎の元へやって来た。
「浦原殿からのお願いを聞きつけ、参りました。」
鉄斎はそう言うと玄太郎の周りに倒れる三人の死神に近づき、さして驚く様子もなく縛道を施した。
「 驚かないんだな。この姿を見て。」
「私も既に見てきましたので。」
鉄斎はそう言うとサンバのような仮面をつけ自分を襲ってきた部下の姿を思い出し、静かに目を閉じた。
「浦原殿は魂魄消失事件が発生した当時からこの可能性を指摘しておられました。浦原殿にならこの状態の彼らを救うことができるそうです。」

「救うったってもうこいつら虫の息だぞ。精霊廷に連れ帰る前に死んでしまうぞ。」
「ご心配には及びません。今から彼らとそして貴方をこの状態のまま一瞬で瀞霊廷にお返しします。」
「んな都合のいいこと、どうやってやるんだよ?」
玄太郎が笑うと鉄斎は力のこもった声でこう続けた。
「空間転位と時間停止を行います。共に禁術。滝殿、しばし目と耳をおふざき下さい!」
鉄斎が力んで術の準備をする様子を見て玄太郎は愉快そうに口角を上げた。
「安心しろ。俺が裁くのは死神だけだ。鬼道衆は管轄外だ。」

??

瀞霊廷は未曾有の大混乱に見舞われていた。
玄太郎の異常なまでの霊圧を感じ尸魂界に異変が起こっていると何となく察していた一般の隊士達は次から次へと入ってくる驚愕の報告に皆呆然とした。
突然の隊長格同士の戦い。
三、五、七、九番隊の隊長を含む隊長格七人の失踪。
鬼道衆副鬼道長の失踪。
鬼道長が禁術行使の容疑で四十六室に拘束。

夜明け前に緊急招集がかかってからたったの2時間だけでこれだけの報告が舞い込んできた。
平隊士たちはどうすればよいのか分からず皆混乱していた。
特に、隊長、副隊長はじめ上位席官がみな不在の九番隊の混乱は酷いものであった。
握菱鉄裁の拘束という最新の情報が入ってからわずか五分後、また新たな報告が届く。
その報告を見て各隊はさらに混乱を極めた。

ーーー　四十六室は一番隊三席滝玄太郎と握菱鉄裁を今回の魂魄消失事件及び、隊長格失踪事件の犯人と断定。
直ちに滝玄太郎を捜索し、捕縛。捕縛が難しい場合には殺害も許可する。ーーー

9話

ーーー　双極の丘　地下　ーーー

「鉄斎が時間を作っている間にこいつらを何とかしろって言われてもな……」

玄太郎は目の前に転がる虚のようにも死神のようにも見える四つの肉体を見て嘆息する。

そもそも玄太郎は生まれてから今まで殺し合いの事だけを考えて生きてきたような人物である。

科学の話など当然わかるわけがないので何をすれば良いのかなどさっぱり分からないのである。

途方に暮れていた玄太郎は瞬時に霊圧を引きあげて軽く地面を蹴った。

玄太郎は背後に一つの霊圧を感じて鞘に手をかけて戦闘態勢に入ろうとする。

「何の用だ、浦原？」

すると緊迫した空気とは場違いな聞き覚えのある声がする。

「待って下さい。敵じゃないっスよ。」

玄太郎は浦原の霊圧から戦う意思がない事を確認するとそっと鞘から手を離した。

「音の反響で周囲の状況を把握してるんスか？すごいっスね。」

「俺は天才だからな。……今はそんなことはどうでも良い。とりあえずだな、この空間は何だ？」

「ボク達は修行部屋って呼んでますね。秘密基地みたいなもんっスよ。」

浦原は特に反省した様子もなくいつもの飄々とした様子で返答する。

玄太郎はまだ何の為にこの空間を作ったのかなど完全に疑問が解消されたわけではないがさらに重要なことがあるため違う質問をする。

「こいつらの症状はなんだ？」

浦原は自分の背後に転がるひより達を見て目を見開いた。
そして何やら独り言をぶつぶつと呟く。
その様子を見て玄太郎は浦原が何かを知っていると確信した。
「知ってるんだな。」
「はい。これは……虚化っス。」
玄太郎はその言葉の意味を理解できない、それどころか玄太郎は千年以上生きてきて初めてその言葉を聞いた。
「最近多発していた魂魄消失事件と似たようなものっス。ただ……彼らは強すぎたんッス。強かったせいで起きてしまった悲劇ッス。」
その後も浦原は魂魄消失した個体がどうのこうのと玄太郎に説明しているが玄太郎には浦原の言っている言葉の意味はさっぱり分からない。
浦原の話を適当に聞き流してた玄太郎はようやく浦原の話が終わったことを確認すると単刀直入に問いた。
「治せるのか?」
「……ボクの話聞いてたっスか?」
浦原は脱力した笑い声をあげると一つ咳払いをして真面目な顔で再び話し始める。
「結論から言うと分かりません。ただ一つ言えることは圧倒的に時間が不足しているっス。彼らの症状には分からないことが多すぎる。ここがバレるのも時間の問題です。四十六室が彼らの姿を見た時にどういう判断を下すのか……」
その時、修行部屋に新たに一つの霊圧が発生する。
しかし玄太郎も浦原も刀を構えることなくその第三の霊圧の主を受け入れた。
いつもの白の隊長羽織は身につけておらず顔もスカーフで隠していたが玄太郎はその人物が誰か一瞬で理解できた。
「夜一か、顔を隠しても溢れ出てくるその魅力……流石だ。」
さっきまでの真面目な顔をすっかり影を潜めて笑顔で夜一に近づいて行く。
いつもの夜一なら玄太郎に強烈なキックをお見舞いするところだ

が今回はキックが飛んでくることは無かった。
夜一は抱えていた四人の死神を重そうにその場に置いた。
汗を拭うと恨めしそうに浦原を睨んだ。
「言われた通り全員持ってきたぞ。儂をパシリに使ったツケは後でしっかり返してもらうぞ。」
「こんなに早く帰ってくるとは流石ッスね！夜一サン！」
玄太郎は夜一が連れてきた四人の死神を見て驚愕する。
彼らの体の半分以上は白い物体で覆われており顔には虚のような仮面が付いていたのだ。
「隊長、副隊長が揃いも揃って……。」
「そうじゃ、お主、今回の事件の首謀者として尸魂界から指名手配されとるぞ。」
夜一は驚くほどサラッと驚愕の事実を言った。
その言葉を聞いて最初に驚いたのは本人ではなく浦原だった。
「なんで滝サンが!?この人はこんな実験できる程頭良くないッスよ!?」
「おい。」
玄太郎は浦原の言葉を聞いてとても愉快そうに大きく笑った。
自分が冤罪で指名手配されているのに呑気な奴だと夜一は心の中で思った。
「んで時間があればこいつらを救えるんだな？」
「……はい、必ず治してみせます。」
玄太郎は浦原の顔から有無を言わせない強い覚悟を感じ取った。
最初会った時は何を考えているかわからない危険な奴だと思っていたが、玄太郎は浦原の評価を改めることにした。
己の才能を理解した上でその使い方を間違えない、ただ一つ真実を求める研究者であると。
玄太郎は浦原と拳を合わせお互いに小さく頷く。
そして玄太郎は踵を返して修行部屋を出て行こうとした。
その行く手を夜一が遮った。
「どうした、夜一。かっこいい別れのシーンが台無しじゃないか。」

「どこへ行くつもりじゃ？」
「どこってそりゃ、貴族の馬鹿どもに挨拶してこようと思ってな。」
玄太郎はいつものように足取り軽く歩いていく。
しかし夜一は険しい表情で玄太郎の後をついて行く。
「鉄斎を助けに行くつもりじゃろ。儂も行く。あやつは儂が屋敷で養っておった男じゃ。見捨てるわけにはいかん。」
「おいおい、鉄斎に嫉妬しちまうよ。」
玄太郎はいつものように軽い調子で言うと夜一と共にその場から消えた。
修行部屋に一人取り残された浦原は一度大きく深呼吸をすると、頬をパチンと叩き気合を入れて八人の治療に当たった。
三人の長い一日が始まったーーー

ーーー　一番隊隊舎　十分前　ーーーー

夜が明けてすぐに行われた緊急の隊首会は異様な雰囲気に包まれていた。
そもそも、この隊首会に参加しているのは卯ノ花と朽木、京楽と浮竹の四人だけなのである。
そして何よりも隊首会の雰囲気を張り詰めたものへと変えているのは中央で静かに佇む山本のせいである。
山本はまだ一言も発してはいないが彼から発される霊圧から強い怒りが感じらた。
その余りの強さにいつもは山本に対して軽口を叩ける京楽でさえ笠で顔を隠して静かにしていた。
「諸君らも知っての通り今、護廷十三隊の隊長の半数以上が行方不明になっておる。四十六室からの通達があったように一刻も早くこの事態の原因究明が必要である。……よって容疑者の最有力候補としてあがっている一番隊三席、滝玄太郎の捕獲を最優先とする。六番隊、八番隊、十三番隊は各々隊を率いて滝三席の捜索に当たること。四番隊は待機。……心してかかれ！滝は手強いぞ。」

山本の言葉が終わっても誰一人として話そうとはしない。
護廷十三隊の重鎮、滝玄太郎の捕獲、殺害という命令に玄太郎と親交のあった者たちは様々な反応を示した。
京楽は笠をさらに深くかぶって顔を隠す。
自分の恩師と戦わなければならない、この極限状態で京楽はどのような表情を浮かべているのか、わかる人は誰もいない。

浮竹は真面目な顔で山本の言葉に耳を傾けていた。浮竹は表情にこそ出していないがとても困惑していた。
浮竹はいつのまにか過去に思いを馳せていた。
真央霊術院の頃から山本にその才能を認められていた二人は山本にとても厳しく指導されてきた。
厳しく指導されて京楽と浮竹がボロボロに傷ついていると玄太郎は決まって道場に入って来て何か問題を起こした。山本はそんな玄太郎に毎回激怒して追い回す。
側から見れば玄太郎は先生らしからぬ変わった死神だっただろう。
しかし浮竹にはわかっていた玄太郎の行動は自分と京楽を休ませるためにやっていたのだと。
そんな優しい玄太郎が意味もなく隊長たちを殺すなど有り得ない、そう思うものの総隊長の決定に異をとなえることはできない。
浮竹は目の前の現実と記憶の中の玄太郎の間で激しく揺れていた。

葛藤する浮竹の隣で卯ノ花は静かに目を閉じていた。
いつもと変わらずただ静かに佇んでいる。
しかしその口元が微かに笑っていた。
その笑いは何を意味するのか、その場にいた誰もまだ理解していなかった。

１０話

これからの話は今から二千年以上前の話である。
護廷十三隊が発足し、優秀な死神育成のために山本元柳斎が真央霊術院を作った頃まで遡る。

「俺は護廷十三隊一の天才だ。天才は何にも縛られてはいけない。さらばだ！」
「待たんか！」
何かしら問題を起こした玄太郎が山本に追いかけられていた。
真央霊術院が出来てから毎日行われている事なのでもはや学生たちは何も驚かなかった。
「僕も大概山爺には怒られてるけど、玄ちゃんはそれ以上だね。凄いねぇ。」
「おい。先生たちをそんな呼び方するなよ。それに滝先生は俺たちを休ませるためにわざとやってくれてるんだぞ。」
ボロボロになっている竹刀を持つ手を見て浮竹は今さっき修行場から飛び出していった先生に感謝した。
しかし彼らに訪れた平穏は長続きしなかった。
帰ろうとした京楽と浮竹の行く手を一人の死神が遮った。
「貴方たちが真央霊術院の首席と二番目ですね。」
「おおー、噂通りすっごい美人だねぇ。」
「何を馬鹿なこと言ってるんだ。十一番隊隊長の卯ノ花隊長だぞ。こんにちは、僕が浮竹でこちらが京楽です。何かご用ですか？」
浮竹の問いかけに卯ノ花は答えることなく無言で険しい目で二人をジッと見つめた。
まるで二人を値踏みするかのように隅から隅まで見ていた。
浮竹と京楽は生きる伝説、剣八を目の前にして体が強張っていることを感じた。
「いや～、美人からの熱い視線ってのはこんなに怖い物だとは思わなかったねぇ。ちびっちゃいそうだよ。」

「確かに……怖いな。」
卯ノ花は黙って二人を見ると咄嗟に修行場の隅で休んでいた学生から竹刀をもらった。
そして再び二人の前に現れるとようやくその重い口を開いた。
「二人一緒でいいでしょう。かかって来なさい。」
「そ、そんな!?卯ノ花隊長と手合わせなんて光栄ですが……」
京楽は尻込みする浮竹の肩を叩き、前に出て卯ノ花と対峙した。
そして浮竹にだけ聞こえる小さい声で学友を叱咤する。
「ここは戦わなかったら、さらに恐ろしい事になるよ。」
浮竹は京楽の言葉を聞き、少し平静を取り戻して目の前の女性を再びジッと観察した。
鬼神の如き威圧感はとても同じ死神とは思えないほど強く、この場を完全に支配していた。
「さぁ、早く構えなさい。戦いだけが我々死神の生きる道ですよ。」
その言葉は浮竹に戦意を持たせるのには十分な言葉だった。

『戦いだけが死神の生きる道』それは浮竹の持つ死神としての矜持と真っ向から相対する言葉だった。
死神が剣を振るう理由は二つ、誇りを守るためと命を守るためである。
決して戦いそのものに意味が訳ではない。
今、浮竹は剣を振るわなければならなくなった。
己の死神としての矜持を守るためにーーー

浮竹が構えたの見て、京楽は遅れながらゆっくりと木刀を構えた。
「さぁ、いっちょお戯れと行こうじゃないの。」
浮竹と京楽は一斉に卯ノ花へと向かって行く。
卯ノ花は獲物を前にした狼のように凶暴な笑みを浮かべて二人の攻撃を受け止めた。
卯ノ花は、男二人の全力の斬撃を涼しい顔で受け止めた。
その細い腕のどこからこれほどの力が出てくるのか浮竹は改めて

目の前の死神の強さを確認した。
「数の利を不意にするなど愚の骨頂。とても戦いを楽しんでいるとは思えない。」
卯ノ花は二人を弾き飛ばす。
浮竹と京楽が体勢を立て直した時には既に卯ノ花は間合いに入っており、目で追いきれないほど速い太刀筋で斬りかかられた。
「くっ!?」
咄嗟に竹刀で身を守った浮竹は目の前で起きた現実が理解できなかった。
自分の手にあった竹刀が真っ二つに折られたのである。
京楽と浮竹、二人掛かりでもビクともしなかった竹刀がいとも簡単に折れた。
非現実的な光景を前に浮竹は背筋に悪寒が走った。
浮竹の顔に恐怖が現れたことを確認すると卯ノ花はつまらなそうに踵を返して帰ろうとした。
その後ろ姿を呆然と見送りながら京楽は疲れた声で小さく呟いた。
「助かったのかな、こりゃ……」
半分になった竹刀を無言で見つめていた浮竹は突然、竹刀を持つ手に力を込めてゆっくりと立ち上がった。
異変を感じ取った京楽が珍しく、驚いていた。
「浮竹!?止めるんだ!」
京楽の言葉は浮竹には届かない。
浮竹には己の死神の矜持しか見えていなかった。
必死で走って卯ノ花に向かう。
しかし浮竹が間合いに入るよりも早く、卯ノ花は振り返り、面倒臭そうに竹刀を雑に振るった。
その竹刀は浮竹の右目を貫こうとした。
まともに食らえば浮竹は失明する。
しかし浮竹の右目から光が失われることは無かった。
卯ノ花の竹刀は激しい炸裂音とともに真っ二つに折られていた。
卯ノ花は驚きと喜びの混ざり合った複雑な表情になった。

卯ノ花の視線の先には竹刀を肩にかけて自信満々の笑みを浮かべた玄太郎が立っていた。
玄太郎は浮竹を庇うように前に立ち卯ノ花に対峙した。
「元ちゃんの秘蔵っ子を傷付けちゃったら大目玉だぞ。」
「それで、総隊長と戦えるのならそれも良いかもしれませんね。」
「あのなぁ……」
玄太郎は頭をかいてどう説得すればいいのか思案を巡らす。
しかし、卯ノ花はもう待ち切れないのか鞘から斬魄刀を出して突進して行く。
道場内の空気が一気に張り詰めた。
玄太郎も竹刀を投げ捨てて斬魄刀を抜き対応した。
激しい金属音が修行場に響き渡った。
隊長と三席が斬魄刀で斬り合う。
まだ実戦を知らない学生達にとっては初めて見る実戦がこの二人というのは幸か不幸か。
おそらく尸魂界で五本の指に入る実力者二人の一騎打ちである。
激しい金属音が何度も響き渡った。
数十回金属音が鳴った後、二人の剣鬼は一度距離をとった。
卯ノ花は霊圧を一気に放出して自分の不満の大きさを示した。
卯ノ花の霊圧にあてられて、その場にいた学生達は浮竹と京楽以外みんな意識を失っていた。
そんな霊圧の中でも玄太郎は飄々とした様子でいる。
「なぜ、貴方から切ってこない。守るだけが戦いな訳がないでしょう。」
卯ノ花の言葉に玄太郎はまた自信満々の笑みで気取った様子で答えた。
「女の子を傷付けるのは絶対にしてはいけない事だ。」
その言葉を聞き、卯ノ花はさらに霊圧を放出して玄太郎に斬りかかった。
玄太郎は卯ノ花の斬撃一つ一つを丁寧に受け流した。
しかし自分から攻撃することは絶対にしない。

玄太郎は卯ノ花の懐に入り強く抱きしめた。
「女の子はそんな物騒な物なんか持たずに俺に抱かれとけ。」
卯ノ花は玄太郎の顔に強烈な殴りを入れた。
玄太郎は悲鳴とともにその場に蹲まった。
「今宵はもう興ざめです。次、剣を交えた時は本気で殺します。」
卯ノ花は腹立たしそうな顔で玄太郎を一瞥するとその場から消え去った。
「棘のある女も中々だ。……そう思うだろ京楽も？」
「僕はお断りしようかなぁ。玄ちゃんに譲るよ。」
玄太郎は鼻をさすりながら立ち上がると膝立ちで崩れている浮竹の元へ行き強引に立ち上がらせた。
「正義と蛮勇は紙一重だぞ。俺たちは死神であって神ではない。俺たちは俺たちの手の届く範囲の平和を守るんだ。それが……死神だぞ。」
普段の玄太郎からは想像もつかないような真面目な言葉に浮竹は驚いた。
ーーーだからこの人は元柳斎先生の右腕なのか。

暖かい雰囲気を壊すようにこの日五本目の竹刀が破壊された。
激しい音とともに浮竹の隣にいた玄太郎は悲鳴とともにその場を転げ回った。
「馬鹿ものが!!儂から逃げられると思ってか!!」
「変な音したぞ!?頭割れてる、絶対割れてる。」
いつもの姿に戻った玄太郎を見て浮竹は僅かに顔を綻ばせた。
その日以来、卯ノ花が玄太郎に一騎討ちを挑むことはなかった。
しかし、二人の再戦の時は近い。
そして卯ノ花の言葉通り、二人は本気で殺し会うこととなる。

11話

ーーー　中央四十六室　ーーー

「握菱鉄裁、判決を言い渡す。」

裁判官の重々しい声だけが響き渡った。

「何か言ったらどうなんだね!!」

裁判が始まってから未だに一言も喋らない鉄斎に四十六室の賢者たちは腹立たしげに怒号を浴びせる。

「何の目的で禁呪を使ったのだ？」

四十六室が聞きたいことはつまりその一点にある。

何も四十六室は今回の魂魄消失事件の解決を願っているわけではない。そんなことは彼ら貴族からすればどうでもいいことなのである。

四十六室としてはどんな些細なことでもいいから鉄斎と今回の事件を繋ぐ言葉を言わせて鉄斎を犯人に仕立て上げたいのである。

「滝玄太郎はどこにいる？」

四十六室は話題を変えて九番隊の応援に駆けつけてから行方が不明の死神について問う。

もちろん四十六室は彼も犯人に仕立て上げようと思っているのだ。

全ては事を迅速に終わらせて自分たちの体裁を保つ。貴族の目的はただそれだけなのである。

ここまでどんな誹謗中傷を言われても顔色ひとつ変えなかった鉄斎の顔が初めて少し動いた。

その様子を見て四十六室の賢者たちはここぞとばかりにまくし立てる。

「知っているのだね？」

「彼が事件の首謀者なんじゃないかい？」

「どこにいる？」

しかし鉄斎が表情を変えた理由は賢者たちが思っているものとは違っていた。

その時突然、固く閉ざされた四十六室の扉が開き、暗い部屋の中に外の明るい光が差し込む。
その光に照らされて二つの人影が浮かび上がる。
「誰だ!?」
「裁判中であるぞ!・不敬罪で訴えられたいのか?」
その人影は一言も発する事なく鉄斎の隣に現れて鉄斎の手枷を外すと鉄斎と共に姿を消した。
「賊じゃ!」
「誰かおらぬのか!」
「誰か!」
賢者たちは逆上し兵を呼ぶしかし部屋に兵がやってくる事はない。
四十六室の守護に当たっていた兵は玄太郎達がくる半刻前には既にみな排除されていたからである。
先程まで騒いでいた賢者たちの声が小さなうめき声と共に突然消える。
四十六室の血まみれの惨状が発見されるのは今から三十時間後のことである。

ーーー　瀞霊廷　某所　ーーー

平隊士たちが忙しなく瀞霊廷内を駆け回っていた。
足音が徐々に遠のいていく。
隊士たちが離れて行ったことを確認した玄太郎と夜一、鉄斎は恐る恐ると周りを見ながら裏路地から出てきた。
「思った以上に大事になってるようじゃな。」
夜一は自分が大罪人の逃亡を手助けしているにも関わらず、人ごとのように呑気に感想を述べる。
隣の筋骨隆々とした大男、鉄斎も無言で頷き同意する。
「ところで、浦原殿は上手にやっておられるのですか?」
「わからん。あやつが何をしてるのか儂にはさっぱりじゃからな。」
鉄斎を四十六室から助け出した夜一と玄太郎は姿を見られないよ

うになるべく霊圧を押さえ込んで隠れながら移動していた。
「あとちょっとで着くな。」
「全く、儂一人なら一瞬で帰ってこれたのじゃがな。」
『瞬神』夜一はニヤリと笑いながら玄太郎たちに軽口を叩く。
玄太郎もいつものように軽口で返した。
「いいじゃないか、世界中を敵に回して逃避行、こんなにロマンチックなことはないだろ。」
「おっしゃる通りです。死神のみなさんは瞬歩を使って移動することの意味を疎かにしております。夜一様も是非今一度歩くことの素晴らしさを感じていただきたい。」
微妙に噛み合わないやり取りをする鉄斎と玄太郎を見て夜一は大きくため息をついた。
そんな和気藹々とした雰囲気を切り裂くように玄太郎たちが通ってきた裏道から一人の死神が姿を現した。
「見つけましたよ。」
その死神は白羽織を着ていてその背中には大きく竜胆の花が描かれていた。
その死神は腰まであろうかというほど長い黒髪を無造作におろしていた。
その首元には痛々しい傷が一つ。
幽霊をも思わせるような光彩を失った目で四番隊隊長『卯ノ花烈』は三人を視線で射抜いた。
「あやつは本当に卯ノ花か……？」
夜一は普段のお淑やかな卯ノ花とはかけ離れた姿を見て困惑していた。
無意識に半歩下がりながら卯ノ花と距離をとった。
「まさか、お前がわざわざ来るとは思わなかったよ。」
一方の玄太郎は困ったような笑みこそ浮かべているがいつものように軽い調子で卯ノ花に対峙していた。
「一応聞いておきます。降参なさいますか？」
「そんなわけ無いだろ。」

卯ノ花は玄太郎の返答を聞きとても愉快そうに笑った。
そして静かにゆっくりと鞘に収められた細い斬魄刀を抜き出した。
「そう言ってもらわなければ困るのですがね。さぁ……斬り合いを始めましょう。」
夜一は言葉にできない恐怖を感じた。
この恐怖は夜一の反応速度を少しばかり鈍らせることになった。
そしてその遅れは夜一にとって致命傷になることになった。
鉄斎も表情には一切出さないが目の前の死神が並みの相手ではないことを感じて気を引き締めていた。
「女の子を斬る趣味は無いんだけどな。」
「此の期に及んでまだそのような戯言を申すか!!」
卯ノ花は普段からは全く想像できない声色と表情で怒りの感情を露わにした。
玄太郎は一切怯むことなく薄笑いを浮かべて話を続ける。
「その姿懐かしいな烈……じゃなくて八千流の方がいいのかな?」
「余り舐めていると一太刀で死んでしまいますよ。それではつまらない。」
卯ノ花は会話を続ける気などないと言わんばかりに霊圧を跳ね上げて斬魄刀を構えた。
卯ノ花の攻撃に警戒して三人も戦闘態勢に入ろうとする。
「あなたがそういう態度ならば私にも考えがあります。」
卯ノ花は玄太郎たちの準備が整わないうちに三人に向かって突進する。
玄太郎は咄嗟に斬魄刀を抜いて対応しようとする。
玄太郎の顔に初めて焦りの色が現れた。
「逃げろ!!」
卯ノ花は玄太郎を素通りしその後ろにいる夜一に対して斬魄刀を振るった。
いつもの夜一なら難なく躱せたが、動揺していた夜一は一瞬反応が遅れた。
闇夜を彩る真紅の血が周囲に撒き散らされた。

夜一は大量の出血とともにその場に崩れ落ちた。
「!!」
卯ノ花に着地する暇すら与えず玄太郎は背後から斬りかかった。
しかし卯ノ花はその斬撃は振り返ることなく斬魄刀を背中に持って行きその斬撃を受け止めた。
卯ノ花と玄太郎の霊圧がぶつかり合い凄まじい風圧で周囲の壁が全て吹き飛んだ。
苛烈な霊圧を放つ玄太郎を感じて卯ノ花は満足そうに笑った。
「ようやく本気になったようですね。」
「お前はやってはいけないことをした。俺の女を傷つけた奴は誰だろうと絶対に許さない!」
流石の卯ノ花も体勢が悪いと判断したのか斬魄刀を払い距離を取った。
玄太郎は辛うじて意識の残っている夜一に駆け寄り、優しい声音で話しかける。
「すまんな。とんだことに巻き込んじまったな。」
「わ、儂が甘かったのじゃ。気にするな……」
息も絶え絶えにか細い声で返事をする夜一を玄太郎は優しく撫でた。
玄太郎は立ち上がると懐に手を入れて、鮮やかな青で彩られた尺八を取り出した。
夜一の心臓が大きく跳ね上がり早鐘を打ち始めた。
「本当はもっとロマンチックに正体を明かしたかったんだけどな。」
玄太郎は己の斬魄刀をこの世に具象化させた。
夜一たちはいつの間にか深い森の中にいた。先程まで厚い雲に隠れていた月がいつの間にか現れており綺麗な満月になっていた。
卯ノ花も何が起こったのか分かっていないのか周囲を警戒していた。
「音姫月下上演」
玄太郎は静かに己の斬魄刀の真名を唱えると尺八を口につけて音

を紡ぎ始めた。
その音は徐々に繋がっていきやがて一つの曲へと姿を変えた。
夜一の人生の中で二度耳にした音楽。
たった二度で夜一の心を強く捉えた儚さと懐かしさが混ざった物悲しい音楽が今、目の前で紡がれていた。
夜一は目を大きく見開いた。

月を見る度に焦がれた想い人、まさにその人が目の前にいたのだ。

夜一はさらに己の身に起こっていることに気付き驚愕した。
傷のせいで微弱で安定しなくなっていた霊圧がみるみる回復していったのである。
霊圧はみるみる内に回復しやがて平常時よりも強くなっていく。
「ど、どうなっておるのじゃ!?」
立て続けに起こる出来事に夜一の脳はとうに処理容量を超えていた。
ただ、この上なく嬉しかった。生死を彷徨っている危険な状況でありながら夜一の心は幸福で満ちていた。

玄太郎は一曲を吹き切るとそっと尺八から口を離した。
一度まばたきをすると夜一たちは瓦礫の散乱した尸魂界へと戻って来ていた。
玄太郎は振り返り、夜一と同じく事態を把握しきれていない鉄斎に話しかけた。
「夜一を連れて早く行ってくれ。」
「……承知いたした。」
鉄斎は一度逡巡すると大きく頷き、その大きな腕で軽々しく夜一の体を抱き上げようとした。
「ま、待て!?儂はまだあやつに聞きたいことが山程あるのじゃ。」
夜一は抵抗しようとするが、回復したのは霊圧だけであり傷ついた体は全く言うことを聞かなかった。

鉄斎に支えられてヨロヨロと立ち上がった夜一は玄太郎の元へ行こうとするが足がもつれて倒れてしまう。
玄太郎は倒れた夜一を優しく立ち上がらせた。
「何を嫌がっている。後でまた会う、それだけの事だろ？」
「じゃが……」
夜一は言葉にはできない恐怖に支配されていた。
ようやく会えた十年越しの想い人、玄太郎と二度と会えない。
夜一にはそんな気がして仕方がなかった。

なおも抵抗しようとしている夜一に玄太郎は少し困った顔をすると、夜一の顔に自分の顔を重ねた。
時間にするとわずか数十秒、しかし夜一にとっては永遠にも感じる程の長くそして心地良い感覚に陥った。
このまま玄太郎と共にこの時間の中に溺れていたい。夜一は玄太郎を離さまいと腕を回す。
しかしそれよりも早く玄太郎は夜一から離れて行ってしまった。
悲しそうに玄太郎を見る夜一を玄太郎は優しく撫でる。
「どうした？俺の好きな女はこんなに泣き虫じゃなかった筈だぞ。心配するな。必ずまた会える。俺とお前は運命で結ばれているからな。」
いつものように軽い調子で言った玄太郎の言葉を最後に夜一の意識は途絶えた。
「さぁ、行け。」
意識を失わせた夜一を鉄斎に任せて玄太郎は再び卯ノ花に向き合った。
「長いこと待たせて悪かったな。」
「気が済むまで存分になさって結構ですよ。それであなたが本気になるならいくらでも待ちましょう。」
玄太郎は霊圧の放出量を再び上げて斬魄刀を構えた。
卯ノ花も霊圧を一気に放出させてこの上ない喜びを表現していた。
「座興はこれにておしまい。存分に楽しみましょう。」

１２話

玄太郎は斬魄刀を抜きその切っ先を卯ノ花へ向ける。
そこまで黙ってことの成り行きを見ていた卯ノ花は二千年以上我慢してきた自分の欲望をついに放つ。
「強い者と斬り合う。それこそが我が人生唯一の楽しみ。さぁ、思う存分楽しみましょう。」
心底嬉しそうに狂気じみた笑顔を浮かべた卯ノ花を中心として漆黒の液体のようなものが周囲を覆い始めた。
「卍解『皆尽』」
卯ノ花の刺すような視線を受けて玄太郎は肩をすくめると無造作に斬魄刀で地面を叩く。
玄太郎の斬魄刀は刀身に無数の穴の空いた鮮やかな青色の斬魄刀になっていた。
やがて玄太郎と卯ノ花の周囲を闇が覆い隠す。
玄太郎と卯ノ花に見えているのはお互いの姿だけで他は全て闇に支配されている。
視界には敵以外映らない。
極限まで殺し合いに集中できるような空間を作り上げた卯ノ花の卍解を見て玄太郎は愉快そうに笑った。
「本当に卍解ってのは使用者に似るもんだな。」
卯ノ花はそれには応じずに斬りかかった。
卯ノ花の斬撃は恐ろしく速くそして重い。
しかし玄太郎はその斬撃一つ一つを涼しい顔で受け流した。
玄太郎が受け流す度に激しい金属音が周囲にこだました。
卯ノ花はその音を耳にする度に全身に鈍痛が走った。
しかしそれらの傷は即座に回復して卯ノ花に戦いを促す。
傷付く度に卯ノ花の斬撃は速く、重くなって行った。
卯ノ花は己の身が生と死の狭間に晒されていることを感じて胸が高鳴った。
久しく感じていなかった戦場の感覚に卯ノ花体の剣八としての血

が徐々に覚醒していく。
何度、皆尽に助けてもらっただろうか。皆尽がなければとっくに死んでいる程の傷を負いながら卯ノ花は遂に玄太郎の反応速度を上回った。
玄太郎の胸から大量の血が飛び散った。
普通なら致命傷になるような深い傷だ。
だがそのような深い傷も一瞬で回復されて玄太郎に戦うことを促す。
玄太郎は自分が致命傷を負ったという感覚に全身に悪寒が走った。
玄太郎は額の汗を拭っていつものように自信満々に笑う。
しかしその笑顔は明らかに無理をして作っているものだと分かった。
「なぜ卍解を解いたのですか？此の期に及んでまだ戦いを舐めているのですか？」
卯ノ花の目はもはや完全に光彩を失っていた。
「悪いな、俺の卍解は一騎討ちには向いてないんだ。それに気難しいお姫様が認めた相手にしか卍解は見せられないんだよ。」
玄太郎は大きくため息をつくとこの日初めて自分から卯ノ花に斬りかかった。
卯ノ花は期待に満ちた顔で玄太郎の次の一手を待ち受けた。
玄太郎の渾身の一太刀は卯ノ花に簡単に受け止められた。
しかし玄太郎の狙いは他にあったのだった。
斬魄刀同士が触れ合ったまま玄太郎は自身の斬魄刀をスライドさせた。
先程までよりも甲高い音が周囲に響いた。
今までよりも更に深い音の刃が卯ノ花を襲った。
初めて卯ノ花に焦りが見えた。
卯ノ花は狂気と狂喜の中で常人離れした判断を下した。
玄太郎の斬魄刀を手のひらで受け止めに行った。
当然、音姫は卯ノ花の肉を断ち切り体内に食い込んだ。
相当な痛みの筈だが卯ノ花にはそんなことはどうでもよかった。

目の前の男に勝ちたい。ただそれだけが彼女の頭を支配していた。
卯ノ花は右手に持った斬魄刀を高く振り上げる。
飛び去ろうとする玄太郎だが卯ノ花の左腕がそれを許さない。
ーーー間に合わない。
卯ノ花の斬魄刀は玄太郎の体を紙を切るようにいとも簡単に切り裂いた。
玄太郎の体にまた深い傷が生まれる。
しかしその傷は直ぐに再生を始めて玄太郎に戦うことを促す
ーーーはずだった。
「なん……だと!?」
玄太郎の傷は完全に塞がらなかった。
ある程度は回復しているため戦闘は続行できるが完全回復には程遠かったのである。
玄太郎は卯ノ花の罠にハマったのかと思い、卯ノ花の様子を観察しようと目を向ける。
玄太郎はさらに驚愕した。
卯ノ花もまた左腕の傷が塞ぎ切っていないのである。
それどころか、卯ノ花の左腕は激しく出血しておりとても使い物になりそうになかった。
「お見事。」
突如暗闇に支配された空間に亀裂が走った。
その亀裂はどんどんと大きくなりやがて、暗闇に一筋の光が差し込んだ。
それは卯ノ花の卍解が解けた事を意味していた。
「皆尽の能力は即時再生。ただその代償として霊圧を差し出すこととなる。先程の傷で私の霊圧は底を尽きました。あなたの勝ちです。」
卯ノ花は左手で掴んでいた斬魄刀を離して玄太郎を解放した。
そして覚悟したように静かに目を瞑った。
意図しない卍解の解除は所有者の死期が近い合図である。
卯ノ花は己の敗北を悟り、玄太郎に殺される事を望んでいるのだ。
しかしいつまで経っても最後の一撃は下されない。

卯ノ花は痺れを切らして玄太郎に詰め寄った。
「なぜ止めを刺さないのです!!私の卍解は解けた。これの意味するところが分からない貴方ではないはず。」
「いいんだよ、もう。十分、夜一の分はお仕置きしたからな。」
「これでも貴方は本気にならないと言うのか!!」
卯ノ花は怒りに任せて玄太郎を殴ろうとするが体の制御が上手くつかない。
足が絡まりその場で倒れてしまう。
「昔も言っただろ?女の子を傷付けるのは趣味じゃないってな。」
卯ノ花はその言葉を聞き一層怒りがこみ上げてくる。
そして絞り出すように苦しそうな声で玄太郎に訴えかけた。
「私が女であること。それこそが罪だと仰るのですか?」
玄太郎は空を見上げて真面目な顔になると冷たい声ではっきりと言い放った。
「ああ。そうだ。」
卯ノ花はその言葉を聞き、却って救われた気分になった。
もしここで玄太郎が下手に言い訳をしたならば卯ノ花は自らの手で命を絶っていたかもしれなかった。
卯ノ花は八千流から烈へと再び戻っていた。
「それでも私は戦いの中で生き続ける。それこそが私の死神としての矜持ですので。」
尸魂界の東半分を焼け野原にした、卯ノ花と玄太郎の殺し合(片思い)に決着が着いた。

??

「卯ノ花よ、四番隊は待機じゃと命じた筈じゃが。」
激闘が終わりようやく静寂が訪れた玄太郎だったが事態はさらに悪化していた。
烈火の如き霊圧を纏った一人の死神が玄太郎に対峙した。
その男こそ、千年以上も尸魂界最強の名を守り続けている当代最強

の死神、『山本元柳斎重國』である。
山本の視線は真っ直ぐに玄太郎を射抜いていた。
山本は放出する規格外の霊圧のみで玄太郎の一連の行動を咎めていた。
「戦う気はあるのじゃろうな？」
玄太郎はゆっくりと斬魄刀を己の体の前へ持っていき無造作に地面に叩きつけた。
「悪いな、元さん。俺はまだ死ぬわけにはいかない。殺さなきゃいけない奴がいるし、それに……逢わなきゃいけない奴がいるんでな。」
音姫から放たれた音を聞き山本の目が大きく見開かれた。
音の波に乗った霊圧は山本に届くことなく、玄太郎を襲った。
「双魚理（そうぎょのことわり）」
浮竹は山本を庇うように前に立ち玄太郎の攻撃を跳ね返した。
「刀を収めてください。玄太郎先生！」
浮竹は普段からは想像も出来ないほどに強い口調で玄太郎に話しかけた。
玄太郎は一瞬驚いたがすぐさま自信満々の笑みを顔に貼り付けて二人に対峙した。
「貴方が理由もなく、護廷に背くはずがありません。何か理由があるのではないですか？」
「理由なぁ……。今の護廷十三隊に飽きたからかな。」
玄太郎は事もなげにさらりと言い放った。
浮竹は目を大きく見開いて信じられないといった表情である。
「そ、そんな筈は……」
「もう良い。お主の返答はしかと聞き届けた。」
山本の言葉が合図となり雀部は卯ノ花を抱えてその場を離れて俯瞰の視点から三人の戦いを見守ることにした。
山本は杖を一本の斬魄刀へと変える。
「万象一切灰燼と為せ『流刃若火』」
山本の斬魄刀を中心として炎が発生する。
その炎に照らされて周囲の温度が急激に上昇しする。

夜だというのに玄太郎たちのいる場所だけが明るく照らされていた。
「やれやれ。その額の傷もう一本増やしてやろうか？」
山本の一振りで恐ろしいほどの質量を持った炎が玄太郎めがけて放たれる。
玄太郎は余裕の表情で音姫を強く地面に叩きつけた。
最初の攻撃よりもさらに大きく低い音がする。
その音は霊圧の壁となって玄太郎を炎から守る。
「大きさ、高さによって矛にも盾にも姿をかえる音。やはりお主らしい雅な斬魄刀じゃな。」
「褒めてくれるならこのまま見逃してくれない？」
「たわけ!!」
山本の霊圧が一層大きくなる。山本が刀を振るうたびにいくつもの炎が生み出され玄太郎へ向かって飛んでくる。
玄太郎はそれらを器用に避けながら間合いを詰めていく。
そして斬撃圏内へと入ると強く踏み込み山本に斬りかかった。
鉄と鉄の激しくぶつかり合う音が周囲に響き渡った。
山本の隊長羽織が傷だらけになる。
しかし山本の体には軽い傷しか付いていなかった。
玄太郎は飛び去り一度距離を取ろうとした。
「あんだけデカイ音立てて、かすり傷ってどんだけ硬いんだよ。」
「二千年以上生きたせいで忘れたのかの？儂にしてみればいつまでもお主は童でしかはないわ！」
山本は逃げられる前にさらに強い、大量の炎を玄太郎に対して放つ。
玄太郎は霊圧で厚い壁を作り上げてそれらを防ごうとした。
一般的に言うところの縛道の八十一『断空』である。
最初の炎が断空に激突したのを皮切りにいくつもの炎が断空に対して突撃していく。
激しい噴煙を上げて浮竹や山本からは中の様子が完全に見えなくなった。

「元柳斎先生、お引き下さい！」
爆煙を払うように音の牙が山本たちに向かって放たれた。
流刃若火の爆発音を利用した、さっきまでの音とは比べものにならないほどの大きな攻撃である。
浮竹は怯むことなく山本の前に立ちその攻撃を受け止めようとする。
「双魚理（そうぎょのことわり）」
音は霊圧に姿を変えて浮竹の斬魄刀に吸収されていく。
しかし、その霊圧は双魚理の許容量を完全に超えていた。
山本が咄嗟に浮竹を庇い背中で音姫の斬撃を受け止めた。
死覇装が完全に破れ去り上半身が露出した。
「中々のものじゃな。」
山本の背中に深い傷が刻まれた。
この傷は山本の生涯消えることのない三つ目の傷になる事となった。
これほどの傷を負いながら未だに立っていられる山本の人外じみた強さに浮竹は震えた。
玄太郎は上空から徐々に降下している。
「……ッ!?」
玄太郎は地面にたどり着く前に周囲に血飛沫を飛び散らした。
月明かりに照らされて怪しく赤く光る血だまりの中心に玄太郎はうつ伏せで倒れる。
影から伸ばされた刀の持ち主は影のある表情で姿を現した。
「きょ、京楽か……。」
「あまり喋らない方がいいよ。肺を貫いたから。」
玄太郎は苦しそうに咳き込みながら立ち上がろうともがく。
しかし流石の玄太郎は卯ノ花との連戦で体に限界が来ていた。
「恨まないでよ。玄ちゃんが教えてくれたんでしょ。戦場に華など存在しない、そこにはあるのは絶望だけだ。だからどんな手を使ってでも生きたものこそが正しいのだと。」
「そんなこと……言った覚えないけど。」

「玄ちゃんの背中から僕が勝手に学んだのさ。」

京楽の言葉を最後に玄太郎の意識はプツリと途切れた。

尸魂界動乱編
13話

ーーー　一番隊隊舎　ーーー

朽木ルキアの処刑が決まってから半日が過ぎ、四十六室から新たな決定が護廷十三隊総隊長『山本元柳斎重國』に告げられた。

その報告を受けて山本は直ちに隊長格二十六名を一番隊隊舎に招集した。

十一番隊や十二番隊の姿が見えないがこの二隊が集合に参加しないのはいつもの事なので誰も口にはしない。

ほとんどの隊長、副隊長が集まった中、一番隊隊舎の中央にある固く閉ざされた扉が重い音を立てながら開いた。

隊長格は皆、一層緊張した面持ちになった。

扉の向こうは真っ暗で何も見えない。

完全なる暗闇から一つの人影が徐々に浮かび上がってきた。

足音はどんどんとこちらに近づいてきて、ついに死覇装に身を包んだ一人の男性が扉から出てきた。

砕蜂や東仙はとても険しい表情でその男の姿を見ていた。

多くの視線の中心にいながら一切動じずにその男はわざとらしく伸びをした。

無間から百年ぶりに釈放された大罪人、滝玄太郎を前に五番隊副隊長『雛森桃』は思わず自らが全幅の信頼を寄せる上司、藍染の背に隠れてしまった。

「大丈夫だ。君は僕が守る。」

雛森のそんな情けない様子を見て藍染は怒るのではなく朗らかに笑い頭を撫でた。

副隊長として情けない姿ではあるのだが、五番隊の隊風なのか隊士たちは皆、雛森を上司として認めていた。

そんな隊長と副隊長の微笑ましいやり取りを無言でじっと見ていた玄太郎はやがて大罪人とは思えないほどいい笑顔で周りを見渡し

た。
「ちょっと見ない間に随分と面子が変わったみたいだな。知り合いなんてほとんどいない。」
その言葉を聞いて砕蜂隊長が激怒して玄太郎に詰め寄った。
「貴様が殺したのだろ!!何故……何故夜一様達を殺した!!答えろ!!」
砕蜂は強い口調で玄太郎に掴みかかった。
玄太郎は頭の中で何やら考えている様子だったが突然、不敵な笑みを浮かべた。
「何故ってそりゃ……あいつらは死神の秩序を乱したからな。」
その言葉を聞きさらに激昂し斬魄刀に手をかけた砕蜂を東仙が制止した。
まだ怒りが収まっていないのは明白だが一旦玄太郎から離れて行った。
このやりとりを無言で見守っていた他の隊長格たちは東仙の冷静沈着さに改めて敬意を表した。
「貴様に秩序を語る資格はない。」
だが東仙も砕蜂と変わらず、その体からはとてつもない殺気が漂っていた。
玄太郎は東仙の肩に手を置くと二人にしか聞こえないほど小さな声で何かを行った。
その言葉を聞いて東仙は明らかに怒りの表情で玄太郎を睨んだ。
東仙を無視してゆっくりと歩き藍染の前にやってきて立ち止まった。
「久しぶりだな、藍染。」
「黙れ。」
普段の藍染からは想像できないほど冷たい声音で後ろにいた雛森は怖くなった。
しかし次の言葉を聞いて雛森の心を支配していたものは恐怖から殺意に変わった。
「反逆者が呑気に隊長か。」
藍染隊長を侮辱された感じた雛森は我を忘れて斬魄刀を抜き玄太

郎に斬りかかった。
他の隊長格たちが一斉に驚いて止めようとする。
しかしもう止めることはできない、その斬撃は玄太郎の右腕に深く食い込んだ。
「見てないで誰か止めてよ。」
右腕から大量の出血をしているにも関わらず軽い調子で言葉を返す目の前の玄太郎にその場にいた皆が得体の知れない恐怖を感じた。
「……そろそろ抜いてくれない？」
玄太郎の言葉で我に返った雛森は慌てて斬魄刀をおさめる。
そして周りの隊長格の視線から自分のしてしまったことの重大さを感じて強い罪悪感を感じる。
「も、申し訳ありません。」
不本意ながらも頭を下げて謝る雛森を玄太郎は大笑いしながら撫でてきた。
「いいぞ、いいぞ。普段は大人しいのに怒ると何をするか分からなくなる。そういうところは可愛いな。」
雛森は何を言われているのか分からなくなり戸惑った。
抵抗もできずされるがままになっている雛森を見て十番隊隊長『日番谷冬獅郎』が怒りの声をあげた。
「おいテメェ!!」
日番谷の怒声がこだました。
砕蜂や東仙も霊圧を急速に発して怒りを露わにする。
異様な雰囲気の隊長たち、そしてその中心に自分がいる事に雛森はとても困惑した。
突如雛森の頭を撫でる手が止まった。
「私の部下にちょっかいを出すのはやめて下さいますか？」
藍染が困惑する部下を見かねたように玄太郎の手を掴んだ。
「部下とは随分と偉くなったようだな。」
「ええ、貴方のいない百年間で全ては変わったのですよ。」
「……そうか、そりゃ楽しみだ。」
他の隊長格には良く意味のわからない会話を終えると玄太郎はま

たゆっくりと歩いて行き、次は卯ノ花の前で立ち止まった。
卯ノ花は玄太郎を前にしても一切表情を変えず目を瞑っていた。
玄太郎はこの張り詰めた雰囲気に似つかわしくないほど軽い調子で話しかける。
「見ての通り怪我しちゃった。直してくれるよね、烈ちゃん？」
「……」
卯ノ花は大きくため息をつくと瞬歩でその場から消えた。
その後を追うように玄太郎もその場から姿を消した。
今にもはち切れてしまうほど張り詰めた空気がようやく少し和らいだ。
隊長達は皆、一番隊隊舎を出て自分の持ち場に戻っていった。
緊張の糸がとけた雛森は予想以上に疲れていることに気付いた。
疲れがどっと押し寄せてきてその場に倒れこみそうになる。
そんな雛森慌てて支えた藍染はいつものように朗らかに笑った。
「ありがとう。僕の為に剣を振るってくれて。でももう二度とあんな無茶はしないで欲しい。あいつは……危険だ。」
そう言った藍染の声はとても冷たく恐ろしかった。

ーーー　十番隊隊舎　ーーー

「んもー、隊長そんなにカリカリしないで下さい。あれは典型的なプレイボーイですよ。あの言葉に深い意味はないですよー。」
「……」
隣で見当違いのフォロー入れてくる十番隊副隊長の『松本乱菊』を無視しながら日番谷は先程の出来事を思い出して整理する。
『隊長・四十六室殺しの大罪人、滝玄太郎』
滝玄太郎は無間に入れられた死神の中では一番最近収容された死神だった。
百年前に突如暴動を起こし当時の隊長六人を殺害した後、四十六室までもを全員殺害したといわれている。
そんな規格外の反逆者がどうして捕らえたのかというとあまり詳

しい情報は与えられていない。
総隊長と一騎打ちをして破れたとしか聞いていない。
その後、四十六室は双極による滝の処刑を要請したが山本がそれを固辞した。
結局、双極による処刑は見送りとなり無間で刑期、一万年が言い渡された。
しかし、事態は一変。急遽四十六室が玄太郎の釈放を決定した。
理由は旅禍の進行に備えた戦力増強と発表されたが、わざわざそんな大罪人を釈放する必要はないというのが隊士たちの総意だった。
日番谷が最も気になっているのはなぜ総隊長は滝玄太郎の処刑を拒んだのかである。
玄太郎の過去の来歴は一切消去されており、同じ時を過ごした死神にしか彼がどんな死神であったか分からないのである。
おそらく当時から隊長をやっていた卯ノ花や京楽、浮竹ならなにか知っているのだろうが、日番谷の頭の中に何人かの古参隊長たちの姿が浮かんだ。
こうして椅子に座って思考を巡らしていても何も進まない。
心のモヤモヤを振り払うように日番谷は勢いよく椅子から立ち上がった。
「隊長……どうされました？」
目を丸くする松本はやがて子供を見るような生暖かい目で日番谷を見る。
日番谷はどうせまた失礼なことを考えているのだろうと思い、松本を無視して隊長室を出て行った。

ーーー　穿界門　内部　ーーー

穿界門の中を駆け抜ける五人の影があった。
「ええか耳かっぽじってよう聞きや。お前らじゃ隊長格には歯が立たん。会ったら絶対に逃げるんや。生き残ることこそが最重要任務や。」

四人は関西弁の口の悪い男、平子真子の忠告を真剣な顔で聞いていた。
オレンジ髪で身の丈ほどの大剣を背負っている男、黒崎一護は先頭を走る平子に同じく喧嘩口調で話しかける。
「おい、あんたの目的は別にあるって言ってたけど何なんだよ？」
「あ？そんなこと聞いて何になんねんハゲ！」
「ハゲてねぇって言ってんだろ、コラァ！」
またいつもの口喧嘩が始まった。
お互いに口の悪い平子と黒崎は事あるごとに喧嘩を繰り返していた。
「あの平子さんも黒崎くんも落ち着いて？ね？ね？」
喧嘩する黒崎と平子の間でオロオロしている美少女の名前は井上織姫である。
「井上さん、もう諦めるんだ。この二人はバカだから学習する事を知らないんだ。」
「「うっせ（うっさいねん）石田ァ。」」
井上を励ましていた石田も二人の喧嘩に巻き込まれてしまう。
「だいたい何やねん。その訳の分からん服は。あぁ？仮装パーティーしに行くんとちゃうぞ!!」
「全くだ。その服のセンスはどうかと思うぞ。」
二人に自慢の服を集中攻撃を喰らい石田の心は既にズタボロであった。
「仲がいいのか悪いのか……」
「真っ白だな。」
「茶渡くんまで……」
石田を攻撃して二人ともスッキリしたのか喧嘩はいち段落して黒崎が改めて落ち着いたトーンで聞いた。
「改めてあんたの目的も教えてくれ。目的を知ってたら俺たちが手助けできるかもしれないだろ？」
平子は真面目な顔になり黙って走り続けた。
黒崎達は促すことなくひたすら平子が自分から話すことを待った。

やがて平子はその重い口を開いて黒崎達に自分の目的を伝えた。
「昔の知り合いを助け出しに行くんや。五人全員まとめてな。」
「五人？」
黒崎は平子の目的が自分達と似たものであることにまずは驚いた。
そしてその次にその人数の多さが気にかかった。
確かに平子は自分達の中で一番強い、それでも十三人いる隊長格全員を相手に出来るほど強いのかは分からない。
普通に考えて護廷十三隊を敵に回すとは自殺行為に等しいことだ。
にも関わらず危険を顧みずに尸魂界に乗り込んでいく。
平子をそこまでさせる人とは一体どんな奴なのか黒崎は純粋な興味を持った。
思考の世界に入り現実から離れていた黒崎を現実に引き戻したのは背後から迫る巨大な追跡者の存在だった。
「おい!?なんか後ろから来てるぞ!?」
「拘突や。逃げるで……走れ!!」

１４話

ーーー　五番隊隊長室　ーーー

一番隊隊舎から帰ってきた雛森は帰るとすぐに藍染に呼ばれて隊長室へ赴いた。

「監視……ですか？」

五番隊の隊長室、六畳間の隊長にしては慎ましい私室で藍染と雛森は話していた。

雛森は突然の藍染からの命令に目をパチパチとさせている。

「雛森君もさっき見たからわかると思うけど、滝玄太郎はとても危険な死神だ。釈放されたからと言って何もしないという保証はない。だが彼は僕をとても敵視している。僕が監視して下手に刺激したくないんだ。」

「でも……」

雛森は急に言い渡された重要任務を前に尻込みしていた。

できれば玄太郎とは関わりたくない、それが雛森の本音であった。

「こんな危険な任務を任せられるのは君だけなんだ。お願いできないかな？」

雛森は玄太郎という得体の知れない死神に対する恐怖よりも自分の敬愛する藍染の役に立ちたいという思いの方が強かった。

「……はい。頑張ります！」

雛森は拳を握って気合を入れて部屋から出て行った。

五番隊の隊士たちは雛森のそんな様子を見て初めてのおつかいに行く子供のように思えて顔を綻ばしているのだった。

「さぁ、死に損ないが。今度こそ死なせてやろう。大罪人としてな。」

藍染は隊長室で一人ククククと人の悪い笑い声を上げていた。

ーーー　同時刻　三番隊隊長室　ーーー

「十番隊の隊長さんと副隊長さんが揃いも揃ってどないしはったんですか？」

「悪いな、ちょっと聞きたい事があるんだ。」

日番谷と松本は玄太郎の情報を探るべく玄太郎が収監された当時既に護廷十三隊に入隊していた市丸のもとを訪れていた。
「玄太郎はんのこと言うてもな。ボクもそん時は入ったばっかの席官だったしよう知らんねん。」
その実、市丸は玄太郎という人物をよく知っているどころか玄太郎が収監された原因を作ったのだがそんなことは二人にはわかるはずもない。
市丸の細い目の奥の隠された真意を見抜くことなど到底できなかった。
しかし幼い時から共に過ごし、市丸のことを最もよく理解している乱菊には市丸が何か隠していることだけはわかる。
「それに玄太郎はんのこと聞くならボクより適任な人ぎょうさんおるやろ？例えば藍染隊長なんか直属の上司殺されてるはずやしよう知っとると思うで。」
「だから藍染は止めたんだ。あいつは何か因縁がありそうだった。なるべく客観的な情報が欲しいんだ。」
「なるほどそれは……厄介やなぁ。」
市丸は含みのある笑みで日番谷を見つめる。
「そや、一つだけ知っとるわ。玄太郎はんの斬魄刀の能力や。」
「「斬魄刀の能力？」」
乱菊と日番谷は思いのほか大きな収穫だと思いその情報に耳を傾けた。
死神にとって斬魄刀の能力は非常に重要な要素だ。
その能力一つで不利な戦況を好転させることも可能である。
その情報は敵の戦力を測る上で最も重要なものである。
「あの人の斬魄刀の能力は幻覚や。相手に現実と違う物を見せる。それが能力や。気い付けや、あの能力は厄介や。」
日番谷と乱菊は滝玄太郎の斬魄刀の恐ろしい能力を各々の頭の中に刻み込んだ。
知っての通りこれは全くの嘘なのだがそんなことをこの二人が知る由もなく鵜呑みにしてしまう。

「済まない、時間とらしちまったな。」
「ええよええよぉ。幸い、仕事もなくて暇やったし……今は。」
日番谷は席を立ち部屋から出て行く。
市丸は乱菊が何か話したそうに自分を見ていることに気付いてはいたが敢えてそれを無視する。
松本も何も話しかけることなく隊長室を出て行った。
「あの人は自分の強さの上で胡座をかいてもた。もう藍染隊長を止めることはできへん。手遅れや。」
市丸は無人の部屋に向かって言い放った。

ーーー　三時間前　四番隊隊舎　ーーー

四番隊隊舎は騒然としていた。
その理由はたった一つだった。
半刻前に釈放された大罪人である滝玄太郎がいきなり重傷を負って卯ノ花と共に隊舎に入って来たのである。
「あのーゴミ出しはさっき八席の方に行ってもらったんですけど……。」
「買い出しは昨日……」
「合コン!?それはただのサボりじゃないですか!?」

普段、戦闘から最も縁の遠い四番隊の隊士たちは皆恐怖を感じて何かと理由を付けては隊舎から飛び出して行った。
そんな中で逃げ遅れた哀れな隊士の一人に護廷十三隊で最も気の弱い席官、山田花太郎がいた。
「虎徹副隊長～。皆さん、あの人を怖がって帰っちゃいます。どうにかしてください～。」
山田は席官とは思えないほど情けない声で副官室で書類の整理をしていた四番隊副隊長『虎徹勇音』に助けを求めていた。
虎徹は顔をあげると、その整った顔に涙を一杯に溜めていた。
「私こそ助けて下さい～。みんな私に仕事押し付けてどっか行っ

ちゃったんです～。」
これが護廷十三隊で唯一の非戦闘部隊、四番隊の実情であった。
山田は今にも泣き出しそうな勇音を見て慌てて山積みの書類を半分を貰い作業を開始した。

??

「ありがとう。お陰で何とか終わりました。」
勇音は山積みの書類を見て嬉しそうに山田にお茶を出した。
山田は恐縮して口籠る。
気まずさを紛らわせるためにお茶に口を付けようとした。
「熱っ!?」
「だ、大丈夫ですか!?」
どこか抜けている二人はしっかり者の卯ノ花がいなければいつもこんな調子なのである。
「あの、虎徹副隊長はあの人のこと知ってるんですか?」
山田は湯呑みをフーフーと冷ましながら気になっていたことを勇音に質問した。
「わ、私もあんまり詳しいことは知らないかな……。アハハ。」
明らかに何か隠している様子なのだが山田は人を疑うということを知らない純情少年であるためすぐに納得してしまう。
「そうですね、恐ろしく強かったとは聞いています。」
「そして音楽の天才だ。」
いつの間にか山田と勇音の間に見慣れない死神が現れた。
その男は自信満々の笑みを浮かべて勇音を見つめていた。
「「うわぁ!?」」
二人は腰を抜かしてしまう。
倒れた勇音を玄太郎は優しく起き上がらせた。
そしてセクハラと訴えられてもおかしくないほど至近距離で勇音に笑いかけた。
「俺がいない間に四番隊にこんな可愛い子がいたとはビックリだ。俺

の左腕は見ての通りボロボロだ。是非ともこれから定期検診をしてもらいたく……」
「私の隊の部下へのセクハラはやめて頂けませんか？」
卯ノ花が呆れた顔で二人を見ていた。
「あ、いや。卯ノ花隊長。これはちがっ……」
「何も違わないぞ。俺たちはもう既に愛し合ってある。さぁ今すぐ定期検診をしに行こう。」
「やめて、頂けますか？」
山田は恐怖で体を震わせた。
流石の玄太郎も恐怖を感じたのか勇音から離れた。
しかし、玄太郎は山田が思っていた以上にぶっ飛んだ人だった。
「そんなに妬くな、妬くな。そうか百年振りに会って募る話も一杯あるだろう。お茶にするか、流魂街では何が流行ってるんだ？どうせなら最先端の店がいいな。さぁ行こう。」
玄太郎はあろうことか卯ノ花を口説き始めたのである。
山田は慌てて玄太郎を止めようとするが山田の制止など全く意味はなく、卯ノ花の腰に手を回そうとする。
「夜一さんに怒られますよ。」
その言葉を聞き玄太郎の動きがピタッと止まった。
山田達の目の前に現れてからずっと騒がしく動き回っていた玄太郎が初めて静かになった。
「あいつに会わなきゃな。」
山田は二人の会話の意味がわからなかった。
正確には意味はわかった。しかしその意図がわからなかったのである。
何故なら玄太郎が会うと言っている人は百年も前に死んでいるのである。
「あの……四鳳院家の前当主様は百年前に亡くなってるんですけど……」
山田は目の前の男が本当に百年間、無間にいたのだと改めて実感した。

それとともに常識のような事すら知らない玄太郎に哀れみを覚えた。
山田は玄太郎がショックで最悪倒れてしまうのでは無いかと考えたがやはり玄太郎は想像以上にぶっ飛んだ男であった。
「それがどうした？俺と夜一は運命で結ばれている。必ず会えるに決まってるだろ。さぁ、夜一を探す旅に出なければいけないな。定期検診はまた今度にしよう。」
玄太郎はまくし立てるように言葉を並べてその場から姿を消した。
「何か……凄い方ですね。」
山田が玄太郎に抱いた率直な感想だった。
卯ノ花は深く溜息をつくと遠くを見つめて独り言のように小さく呟いた。
「本当に……しょうがない人です。」
勇音は玄太郎のせいで乱れた死覇装を直しながら思い出したように副官室の端の棚に向かった。
顔が赤くなっていることを悟られないように軽く咳払いして棚から缶を持ち部屋を出て行こうとした。
「勇音。」
「はいっ!!」
勇音はあからさまに動揺している。
焦って缶を転がして中身をぶちまけてしまった。
「あぁ、新しく買ったエサだったのに～。」
山田も慌てて転がったエサをかき集める。
「エサっていうと……あぁ。隊長が自室で飼ってる黒猫の分ですか。あの猫、夜はいつもどこにいるんでしょうね。昼間しか隊舎にはいないみたいですし……。」
山田と勇音がエサを掃除し終わる前に瀞霊廷内に外敵の侵入を示す警報音が響き渡った。

15話

ーーーー

現世から西流魂街に降り立った旅禍の一行は西の白道門の番人である☒丹坊を下して瀞霊廷に侵入した。

しかし三番隊隊長の市丸ギンが旅禍と接触し退ける。

その際、旅禍の死亡は確認されなかった。

後日、事態を重く見た護廷十三隊総隊長『山本元柳斎重國』は直ちに隊首会を開催し、市丸を問い詰めようとした。

しかしその隊首会の途中に再び旅禍が瀞霊廷内に侵入し、市丸の処分は持ち越しとなり護廷十三隊は戦時体制に移行した。

ーーーー

ーーー　技術開発局　ーーー

「旅禍の中で面白そうな個体はいたかネ?」

「そうですねぇ。この滅却師とその隣にいる女性はどうですか?」

マユリは阿近が指差したモニターに目を移す。

そこには鎌鼬の異名を持つ七番隊四席『一貫坂慈楼坊』と旅禍二人の戦闘が映し出されていた。

「滅却師の方はどうでも良いがこの女はとても興味深いネ。最高の待遇で迎えよう。」

局員たちはマユリの言う『最高の待遇』がどんな酷い扱いなのかわかっていた。

しかしその待遇に同情するような常識に囚われた者などここには居なかった。

皆、それが被検体に対する待遇だと何の疑問もなく思っていた。

そんな狂った連中の中には場違いに気の抜けた声が研究所内に響き渡った。

「チッ。またノコノコとここに来たのかネ。やはり普段は冷凍保存しておくべきだったかネ。……いやそれでは魂魄が劣化してしまうか。」

声の主たちが研究室に入ってくると半魚人のような見た目をした大男の鵯州が慌てて手に持っていたお菓子を隠した。
「あー！今お菓子隠したでしょ。チョーダイチョーダイチョーダイ!!」
駄々っ子になって地面を転げ回る少女に筋骨隆々とした大男の拳骨が落とされる。
「こら、うるせぇから黙れ。」
二人に少し遅れて入ってきた少女は驚いて立ち止まると頭に青筋を浮かべてまくし立てるように早口で言葉を紡いだ。
「ホンマに喜助のハゲがいなくなったら昔みたいに戻るか思たらむしろ悪化しとるやないかボケ!!」
一気に騒がしくなった研究室でマユリが悪魔のような笑顔でその原因に向き直った。
「どうカネ？百年ぶりに蘇った気分は？」
大男が面倒臭そうに頭をかいた。
「どうもこうも、実感がねぇな。」
「そうかネ。それは良い事ダ。」
マユリはその大男の返事を聞いていたのかすら分からない返答をしながら再びモニターに目を移して何やら思案をし始めた。
そして何かいい案が浮かんだのかポンッと手を叩き人の悪い笑みを浮かべる。
「早速だ。君たちには瀞霊廷の為に戦ってもらうとするカネ。」
マユリは三人にモニターを見せて滅却師の情報を説明する。
一通りの説明を聞いた三人のうち一人が案の定、渡された紙を放り投げてマユリに食ってかかる。
「なにが瀞霊廷のために、や！お前の悪事に加担させる気満々やないか!!」
怒る少女を止めて大男はため息混じりに諭す。
「まぁそう言うな。これでも俺たちの命の恩人なんだ。」

ーーー　三十分前　瀞霊廷某所　ーーー

遮魂膜にぶつかり光が四つに分裂した様子を屋根の上から見ていた玄太郎は背後に自分をつけている存在を感じて警戒する。
霊圧を視ると自分が知っているような古株ではないことはわかった。
玄太郎はその死神を撒くために移動を開始した。

??

玄太郎は謎の追跡者と鬼ごとをしていると思ったよりも相手はしつこく中々振り切ることができずにいつの間にか日が落ちてしまっていた。
途中から追跡者の霊圧が二つになりついに戦闘も視野に入れたが二人の霊圧が徐々に離れていった。
一息ついて空を見上げると空には綺麗な満月が浮かんでいた。
無間から釈放されて初めて見る満月。
満月を見ると自然と色々な事が思い出される、夜一や平子たちと過ごした何気ない日々。
しかしそれを知っている人はもう玄太郎の側にはいない。
玄太郎はその事実を特段寂しいとは思わない。
何故なら玄太郎にとってこんな事は日常茶飯事なのである。
護廷十三隊が発足し一番隊三席になってから何人もの同僚を斬ってきた。
その中には親しい者もいた。
それでも玄太郎は斬り続けてきた、それこそが玄太郎の死神としての矜持だからである。
たとえ護廷十三隊の皆から恐れられ、恨まれようが山本を守る、それだけが自分を救ってくれた恩人への唯一の恩返しなのだと信じて。
「何の用だ。」
撒いた二人とはまた違う霊圧が今度は玄太郎の前方からやってくる。

その男は明らかに動揺しており、震える手では斬魄刀も満足に振るうことすらできないのではないかと思われた。
死覇装に身を包み副官章もしていないため下級の隊士であることがわかった。
トラとネズミ、例えるならそれ程の霊圧の差があるにも関わらずその男は無謀にも玄太郎に斬りかかってきた。
玄太郎は難なくその斬撃を避けて斬り返した。
何の抵抗もできずになくその死神は斬られてその場に倒れた。
傷の深さからして恐らく即死だと思われた。
あまりに呆気ない決着に玄太郎は違和感を感じる。
その違和感は案の定的中した。
一度撒いたはずの二つの霊圧が再びこちらに近づいて来ていた。
その内の一つが一気に距離を詰めて玄太郎に斬りかかってくる。
「死ねぇぇぇぇぇ!!」
玄太郎はいつものように自信満々の笑みでその斬撃を受け止めようとする。
「お前何やって……止めろ!!」
しかしその必要は無かった。
その斬撃は追跡者のもう一人が受け止めたのである。
玄太郎は状況が掴めず眉を顰めた。

ーーー　同時刻　瀞霊廷某所　ーーー

十一番隊三席『斑目一角』及び同隊五席『綾瀬川弓親』が旅禍と交戦し敗北。
七番隊四席『一貫坂慈楼坊』が旅禍と交戦し敗北。鎖結と魄睡を撃ち抜かれた為、霊圧を失ってしまった。
六番隊副隊長『阿散井恋次』が旅禍と交戦し敗北。重傷で戦線復帰は困難。
隊長格の瀞霊廷内での帯刀及び、全面開放の許可が総隊長より下された。

次々と舞い込んでくる情報の渦に飲まれて日番谷は軽い頭痛を覚える。
日番谷は朽木ルキアの処刑から始まる一連の騒動には何か大きな存在の意思のようなものが反映されているのではないか、そう思っていた。
そしてその鍵を握る人物は間違いなく滝玄太郎だと確信していた。
「隊長～どこ行くんですか？」
戦時中だというのに呑気にお茶と煎餅をボリボリと食べる乱菊に軽い苛立を覚える。
「お前はもう少し、危機感を持て！」
乱菊の煎餅を取り上げた。

乱菊はブーブーと不満を言いながらもはだけた死覇装を直しながら自分も部屋を出る準備を始める。
文句を言いながらも隊長の護衛のために外に出る。
日番谷も文句を言いながらも乱菊を副隊長として信頼している。
この凸凹さこそが十番隊の色なのだと思う隊士は意外と多くいる。
「見回りに行くぞ。」
「はい。」

??

旅禍が襲来してから最初の夜を迎えた。
戦時中のピリついた空気に合わないほど綺麗な満月が空から瀞霊廷を照らしている。
夜になったが瀞霊廷内では旅禍の襲撃に備えて隊士たちが皆見回りを行なっており騒がしかった。
「雛森!?」
見回りも兼ねて十番隊隊舎周りを徘徊していた日番谷は屋根の上を走る雛森の姿を捉えた。
月明かりに照らされた雛森は普段からは想像できない真剣な表情

をしていた。
「松本、お前はそこで待機してろ。」
日番谷は違和感を感じて雛森のあとを追う。
「どこ行くんだ雛森!!」
雛森は日番谷の言葉を無視して瀞霊廷の中心地からドンドンと離れていく。
やがて明かりの数も少なくなりすれ違う隊士の数も減っていく。
それでも雛森の歩みが止まる事はなく寧ろさらに速度を上げていっている。
日番谷も置いていかれぬよう雛森に合わせて速度を上げて行く。
結局雛森は立ち止まる事はなく、とうとう瀞霊廷の端まで来てしまった。
そこには雛森と日番谷とそして何故か藍染がいた。
「おい、どうしてこんな所にいるんだ!?」
嫌な予感を感じ取った日番谷は雛森に話しかけるが雛森はその声が聞こえていないように振り返ろうともしない。
日番谷は近づいてようやく雛森の様子がおかしい事に気付いた。
回り込んで正面から雛森を見る。
日番谷は驚愕した、雛森は目から涙を流し明らかに憔悴しきっていたのだ。
「ど、どうした……。」
雛森は日番谷を無視して震える手で斬魄刀に手をかけると抜き藍染に向かって斬りかかった。
「死ねぇぇぇぇぇ!!」
「お前何やって……止めろ!!」
自信満々の笑みを浮かべている藍染を庇うように日番谷は雛森の斬撃を鞘で受け止めた。

16話

「止まれ、雛森。誰に刀を向けてるのか分かってるのか!!」
「どいてシロちゃん!!どいてよ!」
雛森と日番谷の間で激しいつばぜり合いが行われる。
日番谷の実力なら雛森を無力化する事など雑作もないことなのだが日番谷に雛森を傷つけることは出来なかった。
そんな日番谷を葛藤から解放してくれたのは今しがたまで日番谷が庇っていた人物であった。
いつの間にか雛森の背後に回っていた藍染は手刀で雛森の意識を失わせる。
日番谷は支えを失った雛森の体を慌てて抱きとめた。
「済まなかった。日番谷隊長。」
「いや、大丈夫だ。」
日番谷は警戒心を露わにして藍染を睨んでいる。
藍染は自分が何故睨まれているのか分からないのか少し動揺した様子である。
「いつ、雛森の背後に回ったんだ?」
「何を言ってるんだい、日番谷隊長?僕は今さっきここに着いたんだけど。」
日番谷は言葉の意味が分からず混乱する。
そして何日か前に聞いた市丸の言葉を思い出した。
「……っまさか!?」
「君が僕だと思っていたものはどうやら僕じゃなかったみたいだね。」
藍染は険しい顔になる。
そして日番谷に背を向けるとどこかへ向かって歩き出した。
「待ってくれ。俺も行く。」
「駄目だ。君は雛森君を守ってくれ。今日の事を知ってしまった彼女もいずれ滝玄太郎に襲われることになると思う。」
「だが……」
腕の中で眠る大事な幼馴染を見つめ、葛藤に苦しむ若者に藍染は優

しく諭す。
「君はまだ若い。これからの瀞霊廷を背負って立つべき死神だ。死神とは常に死と隣り合わせの存在だ。いずれ必ず君も命を賭ける時が来る。その時には君もこうして後世に伝えて欲しい。死神の意志を。」
藍染はそう言うと決意のこもった目でその場から姿を消した。
日番谷は何とも言えない不安に駆られた。
これが今生の別れなのかと思ってしまうほどの藍染の言葉を日番谷は胸に刻む。
次世代の死神を背負って立つ存在として決意を新たに日番谷は雛森を背負って歩き出した。

ーーー
旅禍の襲撃から一夜が明けて瀞霊廷には大混乱に陥った。
温厚な性格で人間性も優れており、隊士からの信頼も厚かった五番隊隊長の藍染惣右介が死体で発見されたのである。
ーーー

ーーー　翌日　瀞霊廷　藍染死体現場　ーーー

「イヤァァァァ!!」
藍染の死体の周りには騒ぎを聞きつけてやってきた多くの隊長格たちが揃っていた。
そして彼らに遅れること数分、四番隊の救護施設から抜け出した雛森が現場に姿を現した。
混乱する死体現場に雛森の悲鳴が響き渡る。
実際には雛森は前夜に玄太郎に斬られた藍染の死体を見ているのだが信じられなかった、信じたくなかった雛森はその事実を意識的に無視していた。
しかし雛森の現実逃避はいとも簡単に失敗に終わった。
長年近くで藍染を見てきた雛森は目の前を死体を見れば見るほど

それが藍染であることを確信できてしまった。
雛森の精神はもやはこの負荷に耐えることが出来なかった。
悲鳴とともに雛森の自我が崩壊する。
ついには視界に映った唯一の幼馴染に殺意向けてしまう。
「シロちゃん……昨日庇ってたよね……？」
光彩の消えた目で射抜かれた日番谷は驚きで目を大きく見開いた。
雛森は斬魄刀を抜くと己の斬魄刀の解放した。
突如膨れ上がった霊圧に現場の空気が一瞬で張り詰める。
「待て、雛森。こんなところで斬魄刀を解放するな!!」
「うるさい！シロちゃんも敵なんでしょ!!」
雛森の斬魄刀から炎が発せられる。
「ちっ。」
日番谷は軽く舌打ちするとその攻撃を避けて雛森を取り押さえようとする。
このまま雛森を放っておけば確実に懲罰を受けることになる。
その前に何としても雛森を落ち着かせなければならない。
日番谷が雛森を止める方法を模索していると突如雛森の背後に人影が生まれた。
雛森はその人影の手刀によって意識を失わされた。
「私情で副隊長のあるべき姿を見失うとは何とも情けないな。」
見下したような冷酷な目で雛森を見ているのは二番隊隊長『砕蜂』であった。
砕蜂は雛森をその場にいた吉良と松本に投げ渡す。
「未だ旅禍は一人も捕まえられていないのだぞ。隊長格達がこんな所で油を売っていて良い訳がないと思うのだが？」
砕蜂の介入によって騒動はいち段落して死体の撤収作業が始まると思われていたが新たな介入者により現場は再び混沌とすることになる。
「ちょっといいか？」
音もなくその場に現れた新たな死神の姿を見て砕蜂は苦々しくその名前を口にした。

「滝……玄太郎。」
玄太郎は再び張り詰めた空気の中でただ一人いつものように軽い調子で自分の用件を話し始める。
「そこのチビ隊長、聞きたいことがある。……なぜ昨日、俺を助けた？」
藍染の斬魄刀の能力を知らない玄太郎からしてみればそれは非常に気になり、そして重要な情報であった。
しかし市丸から玄太郎の斬魄刀について嘘の情報を聞かされている日番谷からしてみればその質問は自分を馬鹿にされているようにしか聞こえなかった。
「……黙れ。
ーーー蒼天に座せ『氷輪丸』」
周囲の空気が急激に低下していることが体感でわかる。
始解で環境に影響を与える斬魄刀。これが最年少で隊長にまで上り詰めた天才の持つ氷輪丸だ。
しかしそれに対峙する死神もかつては最強と言われて多くの死神から信頼され恐れられていた化け物である。
至近距離で解放された斬魄刀を前にしていつものように自信満々の笑みを浮かべると霊圧を炎の形で放った。
炎となった霊圧は氷輪丸と激突し急激に冷やされ水滴という形に姿を変えた。
一連の戦いを見てその場に居合わせた隊長格達は皆舌を巻いた。
「あれが日番谷隊長の氷輪丸。噂には聞いてたけど噂以上の威力だ。」
「それとあの滝三席の蒼火墜、ただの詠唱破棄じゃなかったわよね？」
「おそらく蒼火墜なんだろうけどあの威力は三十番台の鬼道のものじゃないよ。」
日番谷と玄太郎は最初の斬り合いを終えてお互いに次の一手を模索している。
隊長格に匹敵する実力者と隊長の戦いなどこんな瀞霊廷の中心でやって良い筈がなく本来は止めなければならないのだが副隊長クラスの者が止めに入っても自分が深手を負うだけなのが目に見えてい

るため誰も介入出来なかった。
この場で唯一この戦いに介入できる存在である砕蜂はその綺麗な瞳に烈火の如き激しい憎しみを携えて玄太郎の背後に一瞬で移動した。
百年前に隠密機動を束ねていた瞬神『四鳳院夜一』の後を継いだ砕蜂の瞬歩は当代随一である。
玄太郎と言えどもその速度に反応することは出来ない。
砕蜂の斬魄刀の始解『雀蜂』が玄太郎の背中を突いた。
玄太郎の体に大きな蜂紋華が刻まれる。
これは死の宣告であり、再びこの位置に雀蜂が突かれると玄太郎は死ぬことになる。
これこそが砕蜂の斬魄刀の能力、『弐撃決殺』である。
振り返った玄太郎に対して憎しみを隠そうともしない砕蜂は一気に決着を付けようと次の攻撃を開始した。
砕蜂が徐々にその数を増やしていく。
これは瞬歩の応用のようなものであり、高速移動することで残像を大量に残す高等技術である。
「夜一様の仇だ!!」
無数の砕蜂が一気に玄太郎に襲いかかる、それに合わせて黙って戦況を見ていた日番谷も氷輪丸で玄太郎に攻撃する。
背後からは氷の龍が、前方からは無数の暗殺者が、３６０度敵に囲まれた玄太郎はそれでも自陣満々な笑みを崩さずに己の斬魄刀を解放した。
「威を示せ『音姫』」
地面に強く振り下ろし、音姫から大きく低い音が響き渡る。
その音は凶悪な刃となり、砕蜂たちに襲いかかる。
無数の砕蜂の分身たちは同時に切り刻まれて姿を消して、傷だらけの砕蜂だけが転がっていた。
氷の龍も全身にひび割れが走り消失した。
圧倒的な強さを前に吉良と乱菊は言葉を失った。
隊長格二人を何の苦もなくあしらう三席など存在していいのか。

乱菊と吉良は自分たちの知っていた世界が何と小さく狭い物だったのかを痛感させられた。

再び事態が収束に向かおうとしていた時に三度、介入者が現れる。

「助けたろか？」

17話

「助けたろか？」
その男は飄々とした態度でゆっくり日番谷の前に立つと脇差しと見間違えるほど短い斬魄刀を抜き切っ先を玄太郎に向けた。
「射殺せ『神槍』」
そして何の前触れもなく斬魄刀を解放した。
市丸の切っ先が玄太郎の心臓を射抜こうと突進してくる。
しかしこの程度の不意打ちでは玄太郎に致命傷を与えることは出来なかった。
横に飛び去り迫り来る刀を避ける、その右腕の死覇装はわずかに切り離されていた。
しかし身体までは届いていなかったのかそこから赤い染みが生まれることは無かった。
市丸はその事実を確認してにゅーっと狐のように目を細めた、まるで全てが予定通りだと言わんばかりに。
玄太郎の正面に再び砕蜂が現れる。
砕蜂の手には暗殺に特化した雀蜂ではなく、砕蜂の片手だけでは全く収まらない巨大な砲台があった。
「この卍解は暗殺にしては派手すぎる。故に二度と使うことはないだろう、ここでお前を殺したらな。」
雀蜂雷公鞭から放たれた一発の銃弾が玄太郎を襲う。
そのミサイルの威力は正に一撃必殺にふさわしい凶悪なものである。
「……っ!?」
玄太郎は霊圧を練り対抗策を練ろうとしていたが突如その動きを止める。
玄太郎は目の前の強大な霊圧の核弾頭を前にしても至って冷静だ。
回避しようと霊圧を上げた瞬間に異変を感じて動きを止めた。
自分の体が内側から何者かによって侵食されているのだ、初めて感じる体内を蹂躙される感覚に悪寒を覚える。

玄太郎の意識は激しい爆発音と目を焼かれるほどの閃光と共に消え去った。
激しい爆発音をともないあたり一帯が噴煙に包まれた。
噴煙が晴れると大きく窪んだ地形の中心には玄太郎の姿はない。
その場に居合わせた者たちには玄太郎が逃げ延びたのかそれとも死体もろとも消え去ったのか判断がつかなかった。

瀞霊廷内部で複数の隊長格が戦闘をすれば護廷十三隊の誰もが気付くのは当たり前だ。
やがて、総隊長によって派遣された隊士の一団が到着した。
「ハハッ。ハハハハ。やりました、やりましたよ、夜一様……。」
肩で息をしながら狂気じみた笑い声をあげる砕蜂を前にして隊士たちは皆恐怖を感じて身動きが取れなくなる。
「な、なにボケッとしとるんじゃ。はよう動かんかい。」
射場も目の前で起こった隊長格たちによる異次元の戦いを見て震えている自分を鼓舞するように隊士達に激を飛ばす。
射場は改めて自分という死神がとてつもなく弱い存在であることを痛感した。
「いやぁ。随分と派手に壊してくれたねぇ。補修工事が大変そうだ。」
微妙な緊張感の漂う現場の中でその男は散歩中の独り言のようにそんな事を言いながら現れた。
「京楽か。総隊長に言われて私を拘束しに来たのか?」
「そうだよ。瀞霊廷内での無断での卍解使用。しかもその目的が旅禍を倒すためじゃなく、護廷十三隊の隊士を殺すためだなんて、もう山爺はカンカンだよ。……できればすんなりとお縄についてくれると嬉しいんだけどな。」
京楽はいつものように軽い口調で話しているが笠から覗かせる瞳からは有無を言わさない圧がある。
「安心しろ。目的は達した。しかるべき罰は受けよう。」
この事件の後、砕蜂は十八日間の禁固刑が言い渡された。

ーーー　瀞霊廷　地下通路　ーーー

「スゲーな、花太郎。」
「い、いえ……それほどでも。」

阿散井恋次との戦いで深手を負った一護は地下水道で花太郎の治療を受けていた。
すっかり完治した体をあれこれと動かして感覚を確かめていた一護は外敵の存在を感じ取って身の丈ほどもある斬魄刀に手をかけた。
一護の変化を見てまた敵が来たという事を感じた花太郎は邪魔にならないように一護の背後に隠れる。
遠くで様子を伺っていた岩鷲も敵の存在に気付き奇襲をかけるために息を潜める。
無防備に足音を響かせながらやって来た男の姿を見て最初に声を上げたのは奇襲をかけようとしていた岩鷲ではなく、花太郎だった。
「た、滝三席!?」
玄太郎の着ている死覇装はボロボロに破れており本人も体中が傷だらけで立っているのが奇跡という状態だった。
「お、お前は確か……山田はなたれ小僧か。」
「山田花太郎です!!」
花太郎は文句を言いながらも玄太郎に近づいて優しく寝かせると回道で応急処置を始めた。
その様子を見ていた岩鷲が慌てて花太郎を止めに行く。
「おい！お前なんで敵を治療してんだよ。回復されたら厄介だろ。」
「え、でも……このままじゃこの人死んじゃいますよ。」
岩鷲を手で制して一護が玄太郎と花太郎に近づいた。
「頼む、助けてやってくれ。」
「……はいっ!!」
一護の言葉を聞いて岩鷲はなんと甘いやつなのかと呆れたがそういう所が一護らしいのだと思い何も言わずに見回りに戻った。

??

「よっ！目覚めたか？」
花太郎の治療が終わり、数時間がたち玄太郎は意識を取り戻した。
玄太郎は虚ろな目で周りを見ると一護の姿を確認して自信満々の笑みになる。
「あの緑の奴の言う通りだぞ。なんで俺を助けた。」
「理由なんかねーよ。ただ、目の前で死なれるのは何となく気分悪いだろ。」
明後日の方向を向いて不器用に答える一護は明らかに照れ隠しであることがわかった。
「お前、旅禍だろ？」
「そうだけど。」
「浦原喜助と四鳳院夜一を知らないか？」
玄太郎の言葉を聞き一護は眉を顰めた。
なぜ浦原喜助のことを知っているのか。斑目一角もそうだったが浦原喜助は尸魂界でそこまで有名なのか。
有名ならばなぜあの人は現世にいるのか。
様々な疑問が一護の頭の中を巡った。
「知らないのか？」
玄太郎の言葉で我に戻った一護は返答する。
「確かに俺たちは浦原さんに助けてもらって尸魂界に来た。だが、夜一という人は知らない。」
「なに……!?」
玄太郎は身を乗り出して一護に詰め寄った。
まだ傷が塞がっていないと制止しようとする花太郎を振り払う。
「夜一は現世にいるんじゃないのか？」
「だから知らねぇって言ってんだろ。」
玄太郎は今度は動きを止めてブツブツと一人で考え事を始めた。
目まぐるしく変化する玄太郎に完全に置いてけぼりとなった一護と花太郎はどうすることも出来ずにただ玄太郎が戻ってくるのを待

つばかりだった。
「だからその……夜一様は百年前に亡くなったんですって！」
花太郎は意を決したように大声で玄太郎に告げた。
しかし玄太郎はその言葉を意図的に無視しているのか単純に聞こえていないのか一切反応を示さない。
「あいつは生きてる。何故なら俺と夜一は運命で結ばれているからな。」
やがていつもの調子に戻った玄太郎は自信満々の笑みを浮かべた。
「世話になった山田はみだし太郎。」
「ちょっと待ってください。まだ傷が治りきって……そんなっ!?」
花太郎は今さっき塞いだ玄太郎の傷が既に癒えていることに気付いて驚愕した。
玄太郎が動き出したのを確認すると黒崎も立ち上がった。
二人とも瀕死の重傷を負っていたとは思えないほど元気に動いている。
花太郎は目の前の二人の常人とは思えないほどの回復力に恐怖を感じた。
「あんた、護廷十三隊の隊士なんだろ、俺たちを捕まえなくていいのか？」
「馬鹿な事を聞くな。お前らと鬼ごとをしてるほど俺は暇じゃない。夜一と一刻も早く会わなければならない。それに……一番隊三席としての仕事もしなきゃいけないしな。」
そう言うと玄太郎は姿を消した。
「なんか変な奴だったな。」
岩鷲はその場に取り残された三人の感想を端的に代弁した。

18話

ーーー　瀞霊廷　某所　ーーー

「おい、ハゲども耳かっぽじってよーく聞けや！死にたくなかったら大人しく降参するんやな!!」
「断る。」
「んなっ!?」
　猿柿ひよりに投降を勧められた石田はその返答を霊子の矢という形で表した。
　その一撃を難なく躱したひよりの側に新たに二人の死神が姿を表した。
「面構えだけはちゃんとしてやがる。それだけの覚悟があるなら大人しく降参する筈がないか。」
「行っくよーっ。白～スーパーキック!!」
　空中に高く飛び上がり回転しながら繰り出されたキックは目に見えない壁によって防がれた。
「三天結盾」
「すごいよ拳西!!何かよくわからないけど弾かれたよっ！」
　白は自分の攻撃がなぜ通らなかったのかわからず目を丸くしている。
「とても興味深い能力ダヨ。」
　ひよりと拳西の背後からさらに2人の死神が姿を現わす。
　1人は毒々しい見た目をしていて、見た目からして只者ではないことがわかる。
「何でお前まで来とんねん！うちら3人だけで自由にやれ言うたのはお前やないか。あんっ!?うちらじゃ役不足や言いたいんかおん!?」
　早口でまくしたてるひよりを煩わらわしそうにしながら涅マユリはゆっくりと石田と織姫に近づいて行く。
「あんたがこいつらのリーダーかい？」
「……」

マユリは石田の問いかけを無視してなおも2人に近づいくる。
「聞いているのか？」
石田は弓を引き真っ直ぐにその照準をマユリの心臓へと固定した。
しかしマユリはそんなことは一切気にしていないように石田には視線を向けない。
「ひっ……」
井上はマユリのねっとりと絡みつくような視線を感じて背筋が凍った。
生まれて始めて感じる強烈な嫌悪感に体が硬直する。
「とても貴重な個体ダヨ。できれば無傷で手に入れたいのだが投降してくれないカネ？最高の待遇で迎えよう。」
「悪いね。井上さんを渡す気はないよ。」
井上を庇うように石田は前に出て弓を放った。
放たれた高濃度の霊子の弓矢はマユリに届く前に爆散した。
「悪いな、滅却師。こいつ守るのが俺たちの仕事なんだ。」
拳西は不本意そうに顔をしかめている。
拳西の様子を見て石田は目の前の5人の死神が完璧な協力関係にはないと推測した。
状況によってはこちら側についてくれるのではないか？
石田の頭が猛スピードで回転する。

「ぶっ手切れーーー
馘大蛇」
その石田の思考を遮るようにひよりが死角から姿を現した。
その顔には白い虚の仮面のようなものが付いている。
「面白いな。いつから死神は虚の真似事をするようになったんだい？」
「うっさいねん。……うちらも好きでやっとるわけやない。」
隊長格が2人に副隊長格が3人か。
石田は自分達の置かれている状況が非常に切迫していることを至って冷静に客観的に認識する。

そして石田はやはり冷酷にこの状況を脱する方法が一つしかないことに気付いていた。
石田は両手の散霊手套を丁寧に外し始める。
マユリ達は石田の覚悟に満ちた顔を見て、警戒度を最大限にまで跳ね上げる。
「白っ！」
「分かってるよー。」
拳西と白も虚化して一斉に石田に襲いかかる。
「何する気か知らんけど、やられる前にやったれば問題ないやろっ！」
「私は拒絶する！」
白の霊圧をまとった回し蹴りを三天結盾が受け止める。
しかし虚化した白の白打は先程の一撃とは比にならないほど重い一撃だった。
三天結盾にひびが入りいとも簡単に貫通してしまう。
白の白打が届く前に石田は己の奥の手を解き放った。
「攻滅却師最終形態」
白の足に込められた高濃度の霊圧を吸収した石田は攻滅却師の弓矢『弧雀』を引く。
散霊手套を外し爆発的に霊子集束力を高めた石田の矢の威力は隊長格の卍解に匹敵する。
「避けろ、白！」
「そ、そんなこと言ったてムリだよ～。」
拳西も白もこの距離から石田の弓を避けられないことは理解していた。
拳西、ひより、白は即座に生存するための策を考える。
「あれ使うぞ。」
「なっ!?」
拳西の提案を聞いてひよりは一瞬躊躇する。
その理由は二つある。
一つ目はその策は自分たちの命を託すにはあまりにも付け焼き刃のものであるからだ。

二つ目はその策を使うことは自分の死神として生が終わってしまったことを認めることになる気がしたからである。
しかし背に腹はかえられない。
ひよりは悔しそうに唇を噛みながら自分の霊圧を一点に終結させる。
「「虚閃」」
高濃度の霊圧の塊が放たれた矢と正面からぶつかる。
激しい爆風が吹き荒れる。
その爆風のあまりの強さに井上は吹き飛ばされる。
吹き飛ばされた井上の体は地面に叩きつけられることなく誰かに受け止められた。
「ホンマに難儀なことになっとんな。」
爆風がようやく収まり石田とひより達の間にはまるで隕石が落ちた後のような大きな深い穴ができていた。
しかし両者の状態は対照的だった。
瀞霊廷のいたるところから常に霊子を吸収している石田は多少息が上がっているが大きな傷は負っていない。
一方のひより達は石田の強烈な一撃を辛うじて退けたに過ぎず、全員傷だらけである。
勝負は既に決していた。
石田はさらに弧雀に手を掛けて奥で不気味な笑みを浮かべるマユリに狙いを定める。
「実に素晴らしい。もしも私一人で相手していれば一泡ふかされていたかもしれない。しかしこの私にこれほど長く観察の時間を与えたのは失敗だったネ。」
「それはどうかな?」
石田は不敵に笑うマユリを不審に思うがも実際これ以外の攻め手がある訳ではない。
石田は疑念を振り払うように力強く矢を放った。
「それ以外の手はないようだネ。残念だヨ。」
マユリは刀を抜くと己の斬魄刀の真名を告げる。

「卍解――『金色疋殺地蔵』」
マユリの背後に芋虫のような巨体が姿を現す。
赤子の泣き声のような不快な声が周囲に響き渡る。
霊子の核弾頭と化した矢が金色疋殺地蔵を襲う。
金色疋殺地蔵は口を大きく開けるとその矢を飲み込んだ。
そして何事もなかったかのように不快な泣き声をあげる。
「なん……だと!?」
石田は最後の希望までもを失いその場に崩れ落ちる。
マユリは心底つまらなそうに顔をしかめる。
「全くガッカリだヨ。いくら霊子を集める力を上げてもそれを纏めて撃つだけでは芸がない。」
マユリは勝利を確信したようにゆっくりとゆっくりと歩みを進める。
身構える石田の横を素通りしてその後ろにいる研究対象を探す。
「研究対象を渡してくれるかネ?それとついでに研究対象になるかネ?」
「お断りや。オマエなんかに織姫ちゃんを渡したらどんなエッチなことになるか分からへんからな。」
「心外だネ。研究対象として最高の待遇で迎える予定だヨ。」
マユリの視線の先には井上を抱えてさりげなく胸の感触を確かめている平子の姿があった。
石田や黒崎がいたら真っ先に平子に怒る場面だが、あいにく黒崎は地下水路で傷を癒しており石田はもはや立てない状態だ。
この状況をいいことに思う存分、織姫の胸を楽しんでいる平子をマユリは舐め回すような見る。
「そうかネ。なら仕方ない。」
そう言いながらもマユリは胸元から謎の薬品取り出し放り投げる。
しかしその投げられた薬品は平子のいる方向とは反対方向に向かって行った。
「ほな、さいなら~。」
平子は『逆撫』をグルグルと回しながら石田とひよりたちを拾い上

げてその場からの逃走を図る。
追跡するために動き出したマユリは突然足を止める。常に人の悪い笑みをめったに感情を現さないマユリが珍しく困惑の表情を浮かべてた。
ネムは自分の生みの親をまるで敵を見るように冷徹な眼差しで睨みつけている。
自分の最高傑作の異変を感じ取ったマユリは咄嗟に指を弾く。
それが合図となりネムはまるで糸の切れた人形のようにその場に崩れ落ちた。
「まったく、生意気な事をしてくれたネ。」
マユリは瞳の奥を烈火の如く輝かせながら心底楽しそうに呟いた。
廃墟となった瀞霊廷に取り残されたマユリの耳元に地獄蝶からの知らせが届く。
「全く、護廷十三隊の禁錮には穴でも空いてるのかネ。」
知らせを聞いたマユリは投げやりな口調で吐き捨てた。
◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊
一番隊より各隊隊長に通告。
旅禍と会敵した１１番隊隊長更木剣八が瀕死の重体で発見された。
その後懺悔宮に到達した旅禍は６番隊隊長朽木白哉と交戦したが乱入者が入り行方をくらました。
この二つの事実が明らかになったのと同時期に禁錮から二番隊隊長『砕蜂』と五番隊副隊長『雛森桃』が脱獄した。
最後に
朽木ルキアの処刑を三日後に行う。
報告は以上である。

１９話

ーーー　双極の丘　地下　ーーー

「どうじゃ、ここが儂らの遊び場じゃ。」
「喜助から聞いた時は信じられへんかったけどホンマやったんか……。」
平子の話し相手は足元にちょこんと座っている黒猫だ。
その黒猫は妙に年寄りじみた言葉遣いで得意げにこの空間の説明をしている。
双極の丘の地下空間、喋る黒猫……浦原から聞いた時は冗談だと馬鹿にしたことが実際に目の前で起こり平子は軽い目眩を覚える。
そこそこ長い期間を生きてきたと自負していた平子だったがまだまだ自分が若輩者であることを痛感していた。
「そんで、もう滝さんには会ったんか？」
「まだじゃ。……もう姿は見たがの。」
ここまで得意げに話していた黒猫の声が突如小さくなる。
その反応を見て平子は目の前の黒猫が間違いなくあの四鳳院夜一なのだと確信した。
「なんでや!?１００年振りの再会やねんからさっさと会えばよかったやないか。」
「そうはいかん！」
「まさか……。」
夜一が黒猫の姿のままでいるのには何か理由があるのではないか。そんな疑問が頭の中に浮かぶ。
「こういうのは雰囲気が大事かと思うのじゃ……。」
「は？」
黒猫の黒い毛並み越しにもわかるほど赤くなって夜一を見て思わず気の抜けた声が出てしまう。
「儂も機が熟せばあやつの前に姿を現わそう思ってはいたのじゃが、なかなかその時が来なくての。」

「何言うとんねん！」
平子は目の前で乙女のような言い訳を連ねる夜一に半ば呆れながらツッコム。
夜一と話していると平子は思い出したように夜一に簪を渡す。
「何じゃこれ？」
「よー分からんが。喜助からの結婚祝いとか言っとったで。」
「結婚祝いじゃと!?」
黒い毛すら赤になるのではないかと思うくらいに夜一は恥ずかしがっている。
夜一は猫の手で器用にその簪を受け取るとわざとらしく一つ咳払いをした。
「儂らの話は別によいのじゃ。それよりお主達はどうするのじゃ？流石にお主でも尸魂界を一人で相手するのは難しいじゃろ。」
「それは任しとき。俺の斬魄刀は全てを逆転させれる、そう不可能も可能にできるんや。」
「まぁ、儂には関係のない事じゃ。死なない程度に好きにやればよい。」
「好きにやらしてもらいますは。それよりも問題は……。」
平子の視線につられて夜一は器用に岩を飛び降りると軽い身のこなしで倒れている一護の顔の上へと移動した。
「このガキはお主の弟子かなにかかの？」
「俺が弟子なんかとるわけないやろ。だいたいまだそない年寄りちゃうわ。」
大の字で倒れていた一護は鬱陶しそうに何度か呻いて目を開ける。
「お早うさん。よー寝れたか？」
平子は一護の顔をビシバシと何度も叩く。
「イテーぞゴラァ!!」
一護は飛び起きる。
目を覚ましたのはいいが状況が飲み込めずあたふたと周りを見回している。
「ど、どこだここ？朽木白哉と戦ってたら急に全裸の女が乱入してき

やがってそれで……。」
「わかったから少し落ち着けや。」
平子に諭されて深呼吸して一護は周りを見回す。
平子の他に黒猫が一匹と織姫と石田、山田花太郎に見知らぬ死神が3人いる。
「いつまでボサッと立っとんのや!?」
平子は状況が全く飲み込めずに混乱している一護の顔をベシベシと張り倒す。
なおも状況が飲み込めていない一護の目の前に平子は人間の背丈と同じくらいの人形を差し出す。
「な、何だこれ?」
「転心体や。」
「……なんだそれ?」
「喜助のひみつ道具や。」
平子はニヤリと口角を釣り上げて、3本の指をビシッと突き立てる。
「3日や。」
「3日?」
「ルキアちゃんが処刑されるまでの時間や。」
「な!?おかしいだろ!!もっと時間的余裕はあった筈だぞ!?」
「俺らが派手に立ち回った所為で刑の執行が前倒しされたみたいや。」
「なんだよそれ……。」
一護はその場に蹲る。
懺悔宮で朽木白哉と戦った瞬間、心の奥底である一つのことに気づいてしまった。
今のままでは勝てない。
信じたくなくても幾度も死線をくぐり抜けてきた一護の感覚は非常に正確に敵と自分の差を把握してしまう。
そして3日ではその差を埋めることなど到底不可能だということも……。
「そんなに絶望するでない。3日あれば十分あの小僧に勝てるぞ。」

「え……？」
　驚いて人語を話す黒猫を見る。
「卍解を習得できれば、十分に勝機はある。」
「卍解……？」
「説明してる暇はないで。」
　平子がそう言うと転心体が形状を変化させて一護の斬魄刀、斬月が実体化する。
「斬月のおっさん……。」
「剣を取れ、一護。」
「ど、どういうことだよ？」
　斬月は一護の問いに答えずに斬りかかる。
「気張れや一護。舐めとったら死ぬで。」

ーーー　三日後　四番隊隊舎　ーーー

　朽木ルキアの処刑当日。
　各隊の隊長、副隊長がそれぞれの思惑で動く中、尸魂界一番の古株、四番隊隊長『卯ノ花烈』も副隊長の『虎徹勇音』を従えて隊舎を出た。
「凄く変な雰囲気ですね。」
「隊長みなさん、思うところがあるのでしょう。」
　穏やかな口調で淡々と続く会話を遮れるように2人の前に1人の死神が現れる。
　その死神の顔を確認するやいなや勇音は卯の花を守るように刀に手をかけて前に出る。
「まぁ、待て、デートのお誘いに来ただけなんだけどな。」
　気の抜けるほど軽い口調であっけらかんと言う。デートのお誘いならそれはそれで目の前の男を斬らなければならないと勇音は思ったが一度玄太郎と会っている勇音は目の前の男の人となりを知っている。勇音は警戒を解いて一歩下がる。
「逢い引きの誘い相手は間違っているのではないですか？」
「古くから言うだろ英雄は色を好む。女遊びは芸の肥やし。不倫は文化だってな。」

「本当に昔から変わらないですね。」
卯ノ花はため息をつくと声を出して笑う。
卯ノ花らしく控えめで上品な笑い声だったが、勇音は卯ノ花が声出して笑う姿を始めてみて驚く。
一瞬、普段の隊長としての卯ノ花以外の顔が見えた気がした。長年一緒に行動してきた勇音ですら知らない卯ノ花の表情を引き出す玄太郎という男に勇音は改めて畏敬の念を抱いた。
「逢い引きの行き先は私が決めさせて頂きますね。」
「何処へでもお望みのところへ。」
二人が歩き出すのを勇音は慌てて後ろからついて行った。
「ちなみに烈ちゃん。卍解するおつもりは？」
「あなたと手合わせできるなら喜んでしますけども。」
「そりゃ、駄目だ。尸魂界の半分が吹き飛ぶ。」
「そうですね。」
目の前で繰り広げられる規格外の会話に勇音は空いた口が塞がらなかった。
そんな和気藹々とした尸魂界の存続が左右される会話が終わると同時に遠くの方で爆煙が上がりいくつもの霊圧の爆発を感じる。
勇音は隊長格たちが先頭の開始したのだと知る。
大きな霊圧の激突は主に四つ感じる。
双極の丘の方には朽木隊長ともう一つは知らない霊圧だ。
その双極の丘へ続く道のところで下級隊士の軍団同士が争っている。旅禍はそんなに多くの戦力を有していたのかと驚く。
そしてそこから少し離れた所では更木隊長と狛村隊長、東仙隊長が戦っている。まぁ……この戦いは何となく更木隊長が悪いことをしたことが原因な気がすると勇音は頭を抱える。
そして最後の大きな霊圧がこちらに向かってきていた。
「ここで何をしておる。集合時間はとっくに過ぎている筈じゃが。」
三人の目の前に現れたのは護廷十三隊総隊長『山本元柳斎重國』だ。
山本の目による精神的な圧力と規格外の霊圧の圧力の両方を受けた勇音はその負荷に耐えきれずその場に倒れこむ。

玄太郎は倒れる勇音をスムーズな動きで受け止めた。
「ちょっとデートをしてるんだ。外してくれないか？」
「たわけ！」
山本の目が大きく見開かれる。
その目から烈火の如き輝きが宿っていた。
「一度ではなく二度までも儂の思いを裏切りよって。少々お灸を据えねばならぬようじゃな。」
刀を抜く山本を見て玄太郎と卯ノ花も一気に霊圧を解放して臨戦態勢に入る。
今まさに戦いの火蓋がきって落とされようとした時三人の間に二つの影が現れた。
「ここは僕に任せてくれよ、玄ちゃん。」
「先に進んで下さい。卯ノ花隊長、滝先生。」
奇しくも百年前と同じ五人が再び揃う。しかし今回は玄太郎を倒すためではない、玄太郎を守るために現れたのだ。
「お主らは誰に刀を向けておるのかわかっているのかの？」
「これが己の正義に従った結果です。」
浮竹が決意のこもった声で力強く言う。
「痛恨なり。」
より一層山本から霊圧が放出される。
玄太郎達の体が鉛をつけられたように重くなる。これが尸魂界の歴史の重み、護廷十三隊発足から一度も総隊長を譲らない山本元柳斎重國という男の存在の重みである。
「お前ら本当に大丈夫か？」
「いやぁ、正直怖いねぇ。本当に死んじゃうかも知れないねぇ。」
「なら手伝ってあげようか？」
「そんなとこ見られちゃったら七緒ちゃんに笑われちゃうよ。」
一端の言葉聞くようになったじゃないかーーー
飄々と言う京楽の肩を軽く叩いて玄太郎は卯ノ花と共にその場を離れる。
笠で顔を隠した京楽の口元が小さく上がっていた。

「構えろ、童ども。」
京楽と浮竹を灼熱の炎が取り囲んだ。
「行くよ、浮竹。」
「覚悟は等に決めている。」

２０話

ーーー　双極の丘　ーーー

尸魂界の各地では護廷十三隊の下級隊士たちが二つの群れに分かれて闘っていた。

同じ釜の飯を食い幾多の修羅場を共にしてきた戦友が敵同士となり斬り合っている。その場にいた全ての隊士がどうしてこうなってしまったのかと嘆き混乱していた。

「なんとも趣味の悪い卍解じゃな。」

「そんな褒めんとってや。こいつから名前聞き出すんごっつ大変やってんで。」

平子はグルグルと自分の斬魄刀を回しながら双極の丘へと目をやる。

双極の丘では朽木白哉と黒崎一護が死闘を演じていた。

結局卍解は間に合わなかったが、最悪一護には奥の手がある。

勝算はしっかりと立っている。

「ルキアちゃんも確保できたしもう安心や。」

精神的に相当消耗しているのだろう、平子に支えられているルキアはぐったりとしていてピクリとも動かない。

「後は茶渡君と平子さんの友達を助けるだけだね！」

「こんなデタラメな能力……本当にインチキだな。」

井上と石田も重症から回復している。しかし、石田にもう滅却師の力は無く、織姫も戦力としては計算できない。平子は独力で残りの仲間たちを探し出さなければならない。そして百年前の部下への挨拶という特大の用事が残っている。

「そろそろ行かんでええんか？」

昔からよく知る規格外な霊圧を感じて平子は夜一に問う。

「あれは四十六室の方かの。」

夜一は猫の姿で器用にオレンジ色の服を口に咥えて霊圧のある方に真っ黒な瞳を向けていた。

「その服はなんや？」
「あやつに会う時に、はしたない姿は見せられんからな。」
どうやら人の姿に戻った時に着る服のようだ。そんな面倒くさいことをするくらいなら最初から人の姿で行けばよいのではないかと思うがどうせまた長い惚気が始まると思い口をつぐむ。
「モフモフだぁ～。やっぱり我慢できない、触ってもいいですか。触ります!!」
「こら触るな。毛並みが乱れるじゃろ！」
織姫が夜一を追いかける。石田も何度も後ろからさりげなく触ろうとして夜一に注意されている。
全くこんな状況でも緊張感の無い奴らである。しかしこういう雰囲気が平子は妙に心地よかった。
「ほな、四十六室には後から行くわ。平子親衛隊の出陣や！」
平子は数百人の面識のない仲間を引き連れて双極の丘から瀞霊廷へ続く道を塞ぐ下級隊士の軍団へと突っ込んで行った。
「儂も行く。お主らはここでルキアを守っておるのじゃぞ。」
夜一も四十六室へと向かおうとしたその瞬間だった。
先程まで肌がひりつくほど強大だった大きな霊圧が突如不安的に揺らぐ。
「まさかっ!?」
焦りと恐怖が入り混じった感情に体が支配される。いても立ってもいられない夜一は全速力で四十六室へと駆け出した。

ーーー　中央四十六室　ーーー

「何とも趣味の悪い筋書きだな。映画としては零点(ゼロテン)だ。」
怯えと驚きの混ざった複雑な感情に押しつぶされて今にも倒れそうな雛森桃。藍染に致命傷をを喰らい虫の息になりながらも憎しみのこもった目で真っ直ぐに藍染を睨みつける日番谷冬獅郎。
二人の若き隊長格を守るように護廷十三隊の古株が前に立つ。
卯ノ花に日番谷の治療を任せて玄太郎は藍染と対峙する。

「随分と遅いご到着だったじゃないか？」
「お前の蒔いた種のせいで俺はすっかり極悪人扱いだ。お陰で自由に動けなかった。」
「それは何よりだ。」
「だがどうやら間に合ったみたいだ。お前が思っている以上に死神たちは己の矜持を信じる生き物らしい。」
「矜持か……。素晴らしい。」
藍染はそう言うと人を見下したような笑い声をあげる。
「そんな価値のないものにすがれるというのは素晴らしいことだ。いかにも矮小な存在のすることだ。」
「その矮小な生き物に負ける気分はどうだ？」
「負ける？言った筈だ。百年もあれば貴方を抜けると。」
「ほう、なら試してみるといい、俺を超えれたかどうか!!」
玄太郎が踏み込む。
割り込んできたギンとの斬り合いになる。刀が『音姫』から放たれる金属音が市丸の体を傷つけて行く。
斬り合いながら玄太郎は違和感を感じる。
こいつ本気じゃないーーー
とんだ茶番をやらされている気分だ。斬ろうが斬ろうがギンはそれをギリギリのところで受け止める。
斬撃の速度を上げようが下げようが綺麗にギリギリのところでそれを受け止める。
まるで劣勢を演じているようだ。
「何のつもりだ？」
「はて、何のことやら。」
ギンは貼り付けたような笑みを浮かべて軽々と玄太郎の斬撃を受け続ける。
強引に斬り捨ててもいいがギンの態度が妙に引っかかる。
玄太郎は『音姫』を握り直して攻め手をかえる。
力一杯振り下ろした一太刀は一際甲高い音を放つ。
その音の刃はギンを傷つけることなくその後ろで悠々と戦況を見

届けていた藍染の右腕を切り裂いた。
「音姫遊郭。感謝しろお前だけに届く特別な音楽だ。」
激しく出血した右腕を見ながら藍染はピクリとも表情を変えない。
すぐさまにでも追撃を入れたいが体が言うことを聞かない。
砕蜂と戦った時から力を使うたびに体の内側から自分が何者かに喰らい尽くされる感覚に陥る。
最初は大したことはないと無視していた玄太郎だが、その感覚は加速度的に大きくなりさすがの玄太郎でも無視できないほどになっている。
「百年も寝てたから体がなまったのか？」
玄太郎は唇を噛んで自分を鼓舞すると再び、ギンに斬り込む。
その次の音で藍染の息の根を止める。止めるしかない。
しかし玄太郎の目論見は三人目の乱入者によって外されてしまった。
「まだ生きていたとはな。」
玄太郎は目を大きく見開く。白の隊長羽織、その背中には二の文字が刻まれている。
二番隊隊長『砕蜂』は憎しみに身を焦がしながら真っ直ぐに玄太郎を見据えていた。
「どけろ。ここはお前が来るところではない。」
玄太郎の呼びかけに砕蜂ではなく藍染が答える。
「何を言ってるのですか。彼女は立派な主役ですよ。今回の事件のね。」
「なん……だと!?」
玄太郎は最悪の事態を考えて音姫を持つ手に力がこもる。
砕蜂は虹彩の消えた瞳で真っ直ぐに玄太郎を見据える。
「私はお前を殺す。例え悪魔に魂を売ろうとな。」
例え自分に憎しみを持とうと尸魂界を守りたいという信念だけは同じであるとそう信じていた。
「誰を守っているのか分かっているのか!?藍染は反逆者なんだぞ！」

これは砕蜂の作戦だ。こうして藍染を欺いて機を見て暗殺を目論んでいるのだ、そうに違いない。
「黙れ。貴様と話すことなどは何もない。夜一様のいないこんな世界私にとってはもはやどうでも良い。」
「砕蜂……。」
そう語る砕蜂はもう玄太郎の知る夜一に憧れて秩序を重んじる真面目な百年前の彼女では無くなっていた。
彼女をここまで追い込んでしまったのは全て自分の責任だ。
玄太郎は自責の念に駆られる。
自分中で感情が爆発するのと同時に玄太郎の体に異変が起こる。
「そろそろだろう。」
藍染は血だらけの腕を真っ直ぐに玄太郎へと突き立てた。
突如玄太郎の手から『音姫』が滑り落ちた。
藍染の顔が愉悦で歪み、ギンが目を伏せる。
一瞬の静寂の後、四十六室には獣の如き霊圧の咆哮がこだました。
治療に当たっていた卯ノ花も何事かと玄太郎を見て、静かに呟く。
「このままでは尸魂界が滅ぶ……!」
頭が思考するよりも先に反射的に体が動く。
卯ノ花は冬獅郎の治療を中断して斬魄刀を抜いて玄太郎に斬りかかった。
強大な霊圧と霊圧が激突して建物が激しく軋んだ。
この建物も長くは持たないだろう。
「砕蜂は要の所に行ってくれ。崩玉を回収する。」
「私に命令するな。」
宿敵の死神としての最期を見届けながら砕蜂は四十六室を出て行った。
復讐を遂げた彼女が胸の中で何を思っているのか知るものは誰もいない。
「こりゃ、凄い。僕らもはよ行きましょう。巻き添い食らったら大変や。」
「……」

ギンに呼びかけられた藍染は静かに興奮していた。
その理由は二つあった。一つは求め続けていた崩玉がついに手に入ること。そしてもう一つは最強の死神が虚になればどうなるのかという研究者としての百年越しの実験がついに身を結んだことへの興奮だった。
滝玄太郎という死神として既に規格外の能力を持つ男のリミットを外してやる。限界の無くなった彼がどこまで上り詰めるのか藍染はその終着点に敵としてではなく一研究者として興味を抱いていた。
「はよ行きましょ。援軍の到着みたいや。」
再びギンに促されてようやく藍染は名残惜しそうに双極の丘へと向かった。
己の目的の達成のために。

21話

ーーー　百年前　双極の丘　地下　ーーー

「儂はここに残る。」

虚化した平子達をどうにかしようとあれこれ知恵を絞った浦原だが有効な手は打てなかった。

この虚化を完璧に治すには時間としっかりとした設備が必要だ。

浦原は即座に現世への逃亡を決定した。

しかし夜一は尸魂界を離れられない。何故ならこのまま夜一達が現世に行けば玄太郎が一人尸魂界に取り残されることになるからだ。

「夜一様、しばしのお別れです。」

「安心せい。儂もあのアホと合流したらすぐに現世に向かう。」

「そうっスか……。夜一サンがそう言うならボクは止めないっス。」

こうして夜一は尸魂界に残ることになった。

しかし夜一の予想に反して玄太郎が双極の丘に戻ってくることは無かった。

一人取り残された夜一だが玄太郎を残して現世に行くことは出来なかった。

猫の姿で流魂街に身を隠していたある日、偶然通りかかった山田花太郎に拾われて四番隊の隊舎に住むことになった。

卯ノ花には出会った瞬間に正体を見破られてしまったが、特にそのことに触れる事はなく夜一をかくまってくれた。

夜一は再会する日が来ると信じて疑わずにただひたすら待った。

そして百年が経ち、ついにその時が来た。

ーーー　同時刻　四十六室回廊　ーーー

愛する人との再会、それだけを望んで夜一は駆け抜ける。

誰よりも早く、もう二度と逃がさないと心に誓って。

四十六室に辿り着いた夜一を迎えたのは凄惨な光景だった。

「よ、夜一さん……。」
卯ノ花は全身が血だらけで体のいたるところの機能が失われている。
もはや立っているのさえ不思議なほどの重症だ。
初代剣八の卯ノ花をここまで追い込める死神はそう多くいない。
それどころか普通はいない。卯ノ花の強さは夜一自身が一瞬とはいえ百年前に体感している。
その卯ノ花を圧倒する死神など……。
夜一の中に最悪の可能性が浮かぶ。
その考えをかき消したいが、目の前の虚から発せられる霊圧がそれを許さない。
「玄太郎……？」
「……」
玄太郎だった虚は『瞬神』夜一ですらついていけないほど高速で夜一に突っ込んで来る。
卯ノ花が辛うじてその斬撃を受け止める。甲高い音ともに卯ノ花と夜一の皮膚が引き裂かれる。
「夜一さん。私達がここで彼を止めなければ尸魂界が滅びます。」
息も絶え絶えに卯ノ花は夜一に語りかける。
「しかし……今の私では力不足。今の彼は死神の枠を大きく超えてしまっている。」
「わかっておる！」
夜一は混乱する頭で必死に考える。
尸魂界を救う方法を。愛しい彼を止める方法を。
玄太郎は彼女たちに考える時間すら与えない。
回避しても何度も飛んでくる斬撃を辛うじて逃げ延びながら策を練る。
しかし良い案は全く生まれてこない。
ーーー元々こういうことは喜助の仕事じゃ。
心の中で昔の親友を毒づいた。

「アレ、呼びました？」
夜一は百年振りに親友の気の抜けた声を聞いた。
あまりに予想外の声に一瞬何が起きたのか分からなくなる。
「き、喜助!?」
「残念ながらウラハラさんは店番です。」
何もなかった空間に亀裂が生じて中から見覚えのある大男が現れる。
「て、鉄裁!?」
穿界門から現れたのは元鬼道衆鬼道長『握菱鉄裁』だった。
鉄裁は目の前の虚化した玄太郎を見て驚くこともなく、淡々と霊圧を生み出す。
「おどき下さい！
破道の九十九五龍転滅!!」
鉄裁の足元の地面が割れ、巨大な龍型の鬼道が出現し玄太郎を飲みんこんだ。
「お久しぶりです。夜一様。」
鉄裁は律儀に頭を九十度に曲げて挨拶をした。
「そんなことはよい。それより、今喜助の声がした気がしたのじゃが気のせいか？」
「気のせいじゃないっスよ。」
再び声が聞こえる。声は聞こえるが肝心の姿が見えない。
声の出ところを探すとそれは先日平子から渡された簪だった。
「どうも、お久しぶりです。夜一サン。」
夜一は再会を喜ぶ挨拶など一切をすっ飛ばして浦原に問う。
「もちろん策はあるんじゃろうな？」
夜一は浦原の答えを確信を持って待つ。
「当たり前じゃないですか。その為にボク達は現世に残っていたんですよ。」
親友のその言葉を聞いて夜一は玄太郎が助かると確信する。
浦原喜助、この男が出来ると言ったことは必ずできる。

「これで準備万端や。」
間髪入れず、平子が拳西、ひより、白を引き連れて四十六室に現れた。
これで全てのピースが揃った。
平子が指示を出すとひより達は玄太郎を取り囲むように四方に散った。
「こらからどうするつもりなんじゃ。」
「玄太郎サンを現世に転移させます。タイムリミットは約７０分、玄太郎サンが助かるかどうかは本人次第ッス。」
「来るで！」
鬼道の龍から脱出した玄太郎はほぼ全身が虚化しておりもはや玄太郎の面影はどこにも残っていない。
平子達は虚化して一斉に玄太郎に斬り込んだ。
「皆さん、耳をお塞ぎ下さい。」
「そない悠長なこと言ってられるかいな！」
この極限の状況でも鉄裁は律儀に注意を呼びかける。
鉄裁は素早く詠唱をすると中央四十六室の空間を浦原商店の地下修練場へと移転させた。

ーーー　浦原商店　地下修練場　ーーー

「皆さん来ます。用意を！」
モニターを見て会話をしていた浦原が慌てて呼びかける。
いつもの飄々としたとした声音とはかけ離れた浦原の声にその場にいた誰もがこれから死闘が始まるということを認識した。
「来週のジャンプめっちゃ楽しみなんだけど読めるかな。」
「読みたいなら生き残るしかないでしょ。」
強大な霊圧を伴って修練場に四十六室が現れる。
「殺すつもりで行け。手加減したら死ぬで!!」
平子の叫び声を受けて〝仮面の軍勢〟は皆一斉に虚化して玄太郎に斬りかかった。

「ハッチ、壁追加であと１０枚用意や。」
「そ、そんな急には無理ですよ。」
「ええからやれ!!」
斬り込んでは弾き返される。
そんな単純作業がひたすら繰り返される。しかし時が経てば経つほど、平子達の傷は増えていき一人、また一人と動きが止まるものが現れていく。
「いま何分や!?」
「６０分っス。」
タイムリミットはあと約５分、それまでに玄太郎が正気を取り戻せなければ玄太郎は完全に虚と化してしまう。
「まず俺らが持つかわからんな。」
既にまともに動けるのは平子と拳西、夜一しかいない。
しかしその三人も既に満身創痍。とても戦えるような体ではない。
「くそっ!?」
「拳西!!」
拳西が吹き飛ばされる。
その一瞬、平子が拳西に視線を移したその一瞬を突かれて平子も玄太郎に吹き飛ばされた。
身体中のありとあらゆる骨が折れた感覚がする。体が悲鳴あげる。
指一本動かすことができない平子の元に玄太郎がやってくる。
「ここらが潮時かいな……。」
平子は目を閉じて己の最期を悟った。
玄太郎は斬魄刀を振りかぶって目にも留まらぬ速さで振り下ろす。
切っ先が平子に達する寸前で止まった。
「お主にもう一度逢うまでは死ねないのじゃ。」
「……」
「さぁ、目を覚ませ玄太郎！約束通り会いに来たぞ!!」
夜一の必死の呼びかけが届いたのか、それとも玄太郎が内なる虚に打ち勝ったからかそれは本人にしか分からない。
ただ一つ言えることは玄太郎は死ななかったという事だ。

玄太郎の動きが突如止まる。玄太郎の全身を包んでいた虚の体にヒビが入る。そのヒビはどんどんと全身に広がっていき、やがて音を立てて崩れていった。

「また会えたな夜一。やはり俺とお前は運命で結ばれているみたいだ。」

「当たり前じゃ。」

夜一は力一杯玄太郎を抱きしめる。もう二度と離れないように、どこにも居なくならないように、そう願いながら力の限り玄太郎を抱きしめる。

玄太郎は心底嬉しそうに笑うと夜一を抱きしめ返す。

二人の心の中は言葉では言い表せないほどの幸福感で満たされていた。

22話　エピローグ

ーーー浦原商店ーーー

玄太郎は虚化が解けてから1週間、死んだように眠った。
その間に自分の深層世界の中で起こった出来事を玄太郎は誰にも語らなかった。
正確には誰にも言えなかったのだがその事は本人しか知らないことだった。
長い眠りから覚めて今は夜一に眠っていた時に起きたことを聞いている。
五番隊隊長『藍染惣右介』、三番隊隊長『市丸ギン』、七番隊隊長『東仙要』、そして……二番隊隊長『砕蜂』が尸魂界に反旗を翻し、虚圏へ行ったこと。
それを受けて朽木ルキアの処刑が取り消されて、十三番隊への復隊が決定したこと。
また、一連の事件を受けて黒崎一護が死神代行として空座町を守る役割を得たこと。
「砕蜂が反逆者か……。」
玄太郎は悔しそうに唇を噛む。
夜一も目を伏せた。
「砕蜂を藍染たちの問題に関わらせたくなかったから敢えて距離を置いていたのじゃが、こんな結果になると思わなかった。」
「一人で抱え込むな。あいつをあそこまで追い込んだのは俺の所為でもある。俺たちで何としてでも連れ戻さなきゃならないな。」
「そうじゃな。説教してやらねばいかん。」
玄太郎と夜一の間に気まずい沈黙が流れる。
百年ぶりの再会は本来喜ばしい事だが状況が状況でありお互いに口が重くなっていた。
「ところで俺はまだ死神なのか？」
「そのことは後で喜助から聞くと良い。」

「そうか……。」
夜一の口ぶりから自分が純粋な死神では無くなってしまったことを悟る。
「元ちゃんから何か連絡はあった？」
「いや何もない。隊長を四人も失って護廷十三隊も大変なのじゃろう。」
「そうか……。」
「まぁ、今は俺の出る幕じゃないな。」
隊長が四人欠ける、護廷十三隊発足以降で1、2を争う緊急事態だが玄太郎はそれほど慌ててはいない。
護廷十三隊が発足してから山本元柳斎重國が総隊長を守り続けているのは、その規格外の武力に加えて、中央四十六室をはじめとする気難しい貴族との利害調整もそつなく政治力の両方が飛び抜けて高いからなのだ。
武力を支えていたのが滝玄太郎なら、政治を担当していたのは雀部だ。
昔はむさ苦しい隊士という印象だった雀部は一番隊副隊長に就任し、中央四十六室と話す機会が増えるようになり、服装を変えた。
本人曰く、貴族に舐められない為にはまず身なりから変えなければいけないらしい。
貴族然としたその見た目は当然、隊士たちから批判されることも多くあったが雀部は全く気にしていなかった。
『ノ字斎様の支えになれるなら周りの見聞などどうでもいい。』
何事に対しても適当な玄太郎とは正反対であるが故に衝突の絶えない二人だが、玄太郎は雀部に護廷十三隊の誰よりも信頼を置いていた。
その内落ち着けば、雀部から怒りの呼び出しが来るだろう。
呑気に考えていた玄太郎は体を起こして、改めて夜一を見つめた。
百年ぶりに見る夜一の顔は、髪が少し伸びていたが全く色褪せていない。
「また会えたな。」

「お主曰く、儂らは運命で結ばれておるのじゃろ？」
「その通りだ。ようやくお前も認めたようだな。……結婚するか？」
玄太郎らしい、唐突な求婚だった。しかし夜一は特段驚く様子もなく、極めて落ち着いて玄太郎の申し出を受け入れた。
驚くほどあっさりと結婚することになった二人だが、そんなことに全く違和感を感じていないようだ。
「さてと、いつまでも寝てたら体がなまってしまうな。」
玄太郎は布団から飛び起きてすぐさま部屋から飛び出す。夜一も慌てて玄太郎のあとをついて行った。
「元ちゃんからの連絡が来るまでは休暇という事にしておこう。せっかくだ、現世の街でデートと行こうじゃないか。どんな店が流行ってるんだ？確か百年前は帝国華撃団とかいうのが人気と聞いたことがあるぞ。」
「そんなものは今は無い。」
「そうなのか!?俺としたことが流行に乗り遅れるなんて……ならどこに行こう？」
「どこでも良い。」

『お主となら』

最後の言葉は夜一の心の中にしまわれたまま、発されることは無かった。